

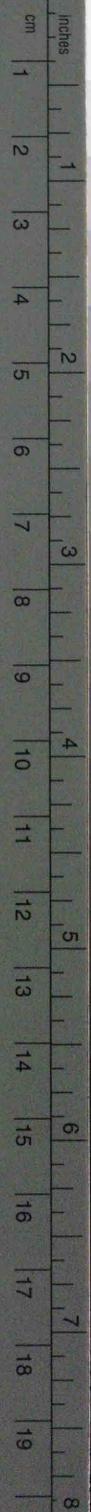
41659

教科書文庫

|            |
|------------|
| 4          |
| 810        |
| 41-1912    |
| 2000302691 |

## Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



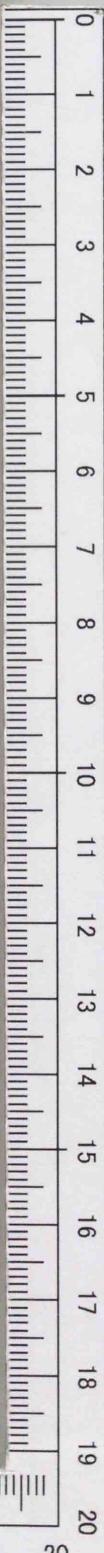
## Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak



修訂中等國語讀本

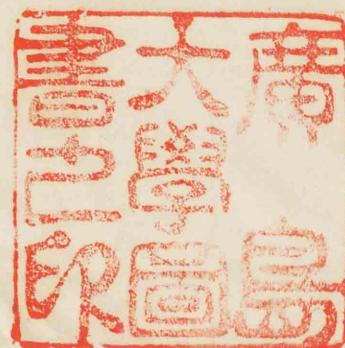
聯合直文編  
森林社  
萩原

資料室

375.9  
Oct

訂修 中等國語讀本卷十目次

- |              |    |
|--------------|----|
| 一、國典の研究      | 一一 |
| 二、明治の詔敕      | 八  |
| 一、五箇條の御誓文    | 八  |
| 二、大日本憲法發布の詔敕 | 九  |
| 三、韓國併合詔書     | 一一 |
| 三、菅公 その一     | 一三 |
| 四、菅公 その二     | 一八 |
| 五、琵琶行        | 二五 |



## 六、狂文二篇

一、鼠を責むる詞

二八

二、上野廣小路蕎麥飯の報條

二九

## 七、世の中(俳句)

三〇

## 八、鉢の木その一

三一

## 九、鉢の木その二

三二

## 一〇、鉢の木その三

三七

## 一一、西洋文藝復興と明治の盛代

四四

## 一二、重盛諫言その一

四五

## 一三、重盛諫言その二

五六

## 一四、朗詠數則

六七

## 一五、わが國の繪畫

七〇

## 一六、玉づさ四篇

七七

## 一、小澤蘆庵主のもとに

七八

## 二、人の氷をおくれるに

七八

## 三、月の夜友のもとに

七八

## 四、雪の朝友のもとに

八二

## 一七、祭のことば

八二

## 一八、文學藝術の三作用その一

八七

## 一九、文學藝術の三作用その二

九二

## 二〇、鏡の影

## 一、時平の敷勘

九七

- 二、 鶯宿梅 ..... 九八  
三、 けづり屑 ..... 一〇〇  
四、 大堰川の三船 ..... 一〇四  
二一、 御民われ（和歌） ..... 一〇六  
二二、 孟子と教育 ..... 一〇八  
二三、 小原御幸 その一 ..... 一二一  
二四、 小原御幸 その二 ..... 一二七  
二五、 神道 ..... 一三一

卷十目次 終

修訂 中等國語讀本卷十

一 國典の研究

國典のことについて、余の、平素懷抱せる意見を述べん。嘗て、或人、余に問ふに、「國典は、これを講究する必要ありや否や」を以てす。余答へていはく、「いふまでもなく、必要あり」と。然れども、何故に、國典を講究する必要あるかとの反間に對しては、更に、分析的の答をなすを要す。即ち、國典は、國家の政事のため、並に、教育のために、最も必要なり。

歴史を案ざるに、洋の東西を問はず、時の古今を論ぜず、いづれの國も、その憲法、および百般の政事に就きて、その淵源基礎をおのが本國の歴史典籍に取らざるはなし。即ち、國の歴史上の沿革、および、故典慣例は、その國の憲法、並に、政事の源なり。

西洋の或學者は、「政事は、なほ、樹木を植うるが如し。その土地固有の樹木か、又は、少くとも、その固有の樹木に接木して、密著の生育を爲し得るもの採用し、且、密著の生育を遂ぐるやうになさざるべからず」といへり。こは、極めて卑近にして、適切なる譬喻といふべし。國典の、政事上における關係につきては、既に、他に詳述したる書もあれば、余は、贅言を費さ

ざるべし。

次に、國典を知ることは、國民教育の上に、大いなる必要あり。凡人民相集つて、國を成す上は、その國を護る必要あり。人

井上毅肖像



民自ら、その國を護るは、人民が、その國を愛する結果なり。而して、愛國の心は、普通の國民教育によりて、生成發達するものなれば、世界各國、いづれの國においても、國の獨立を保つには、まづ、國民教育を尊重せざるべからず。國民教育の主眼は、第一、本國の歴史を教ふること。第二、國語を教ふることこれなり。國典は、おのれの國の祖宗、お

よび、先哲の偉業を知らしめ、おのれの國の尊きを感じしめ、又、おのれの國は、即ち、父母の國なることを、腦裏に銘せしむ。且、國語を研究するにも、國の古典古書につきて、國語の出處を見出すを得べし。この故に、國典の講究は、國民教育上、必要缺くべからざるものとす。

これを、反対の側よりいはば、國民の愛國心を磨滅せしめんとするには、その人民が、本國の歴史を讀むことを妨げ、又、本國の國語を使用せしめず、他國語を教ふるを以て、極めて巧妙なる策略とす。露西亞が、中央亞細亞の人民をなづくるには、即ち、この策略を用ゐ居るなり。この點より觀察すれば、國の歴史と國語とを教ふるは、國民の愛國心を養成するに、

最も必要なること、愈明瞭なるべし。余、故にいはく、「國典の講究は、國民教育上、必要缺くべからざるものなり」と。余は、各國において、國民教育を、教育の要素の一となすことを賛成するのみならず、わが國においては、進んで、國民教育を以て、教育の主腦とし、德育の全體を包括するものたらしめんとの意見を有す。

國典講究の必要は、かくの如く大いなり。然らば、政事教育は、國典の講究のみを以て満足すべきかといへば、余は、これに對して、否と答へざるを得ず。如何となれば、人類知識の度は、世を逐ひ、時を逐うて進歩するものにて、わが國人も、西洋人も、支那人も、多少の長短出入はあらんも、要するに、皆、人類

の知識進歩の、永遠の年度中に競争進歩しつつあるものなれば、他國において、新發明新著述あるを、或は、そのままに採用し、或は、斟酌折衷して採用するは、知識進歩の年度中にあら、人類當然の務なり。中古、漢學を採用したる時代、宇多天皇の詔に、「則を六經に求め、道を有識に問ふ」と宣ひしは、實に、至公至平の叡慮といふべし。

更に、これをいはば、國と國との間の知識交通の關係は、なほ、水平の如し。甲池と乙湖との間に、新に、交通の水道開けたる時は、水平の高き方より、低き方へ落下し来る勢を生じ、低き方は、高き方へ向ひて、吸收力を生ずるは、自然の理なり。この時に當つて、その水平の平均を妨げんとする者は、古人の

所謂、「隻手を以て、江河の流を塞ぐ」の類なり。支那にもせよ、西洋にもせよ、その文物技藝等、わが國よりも、知識の度の進歩したるものあらば、わが有識の士は、全力を盡して、速に、これを採用し、斟酌すべし。これ即ち、愛國の目的に適したる處置なり。但、その採用し、斟酌する際、自他、本末主客の辨別を明にすることの必要なるは勿論なり。故に、余は、もし、政事教育のために、國典を講究するのみを以て足れりといふ人あらば、已むを得ず、これに反対せざるを得ず。

以上の所説は、要するに、或人の間に對して答へたる「國典を講究する必要あり」との一言の註解なり。井上毅の演説による

## 二 明治の詔敕

(明治元年三月十四日)

- 一、廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スベシ
- 一、上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フベシ
- 一、官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂げ人心ヲシテ倦マザラシメン事ヲ要ス

一、舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クベシ  
一、智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スベシ  
我國未曾有ノ變革ヲ爲ントシ朕躬ヲ以テ衆ニ先ンジ  
天地神明ニ誓ヒ大ニ斯國是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ立  
ントス衆亦此旨趣ニ基キ協心努力セヨ

(明治二十二年二月十日)

## 二、大日本憲法發布の詔敕

詔命  
國會開設の詔。

朕祖宗ノ遺烈ヲ承ケ萬世一系ノ帝位ヲ踐ミ朕カ親愛スル所ノ臣民ハ即ケ朕カ祖宗ノ惠撫慈養シタマヒシ所ノ臣民ナルヲ念ヒ其ノ康福ヲ増進シ其ノ懿德良能ヲ發達セシメンコトヲ願ヒ又其ノ翼贊ニ依リ與ニ俱ニ國家ノ進運ヲ扶持セシムコトヲ望ミ乃ケ明治十四年十月十二日ノ詔命ヲ履行シ茲ニ大憲ヲ制定シ朕カ率由スル所ヲ示シ朕カ後嗣及臣民及臣民ノ子孫タル者ナシテ永遠ニ循行スル所ヲ知ラシム

國家統治ノ大權ハ朕カ之ヲ祖宗ニ承ケテ之ヲ子孫ニ傳フル所ナリ朕及朕カ子孫ハ將來此ノ憲法ノ條章ニ

循ヒ之ヲ行フコトヲ憲ラサルヘシ

朕ハ我臣民ノ權利及財産ノ安全ヲ貴重シ及之ヲ保護シ此ノ憲法及法律ノ範圍内ニ於テ其ノ享有ヲ完全ナラシムヘキコトヲ宣言ス

帝國議會ハ明治二十三年ヲ以テ之ヲ召集シ議會開會ノ時ヲ以テ此ノ憲法ヲシテ有効ナラシムルノ期トスヘシ

將來若此ノ憲法ノ或ル條章ヲ改定スルノ必要ナル時宜チ見ルニ至ラハ朕及朕カ繼続ノ子孫ハ發議ノ權ヲ執リ之ヲ議會ニ附シ議會ハ此ノ憲法ニ定メタル要件ニ依リ之ヲ議決スルノ外朕カ子孫及臣民ハ敢テ之カ

紛更ヲ試ミルコトヲ得サルヘシ

朕カ在廷ノ大臣ハ朕カ爲ニ此ノ憲法ヲ施行スルノ責ニ任スヘク朕カ現在及將來ノ臣民ハ此ノ憲法ニ對シ永遠ニ從順ノ義務ヲ負フヘシ

### 三、韓國併合の詔書

朕東洋ノ平和ヲ永遠ニ維持シ帝國ノ安全ヲ將來ニ保障スルノ必要ナルヲ念ヒ又常ニ韓國カ禍亂ノ淵源タルニ顧ミ曩ニ朕ノ政府ヲシテ韓國政府ト協定セシメ韓國ヲ帝國ノ保護ノ下ニ置キ以テ禍源ヲ杜絶シ平和ヲ確保セムコトヲ期セリ

爾來時ヲ經ルコト四年有餘其ノ間朕ノ政府ハ銳意韓

日  
(明治四十三年八月二十九)

國施政ノ改善ニ努メ其ノ成績亦見ルヘキモノアリト  
雖韓國ノ現制ハ尙未タ治安ノ保持ヲ完スルニ足ラス  
疑懼ノ念每ニ國內ニ充溢シ民其ノ堵ニ安セス公共ノ  
安寧ヲ維持シ民衆ノ福利ヲ増進セムカ爲ニハ革新ヲ  
現制ニ加フルノ避ク可ラサルコト瞭然タルニ至レリ」  
朕ハ韓國皇帝陛下ト與ニ此ノ事態ニ鑑ミ韓國ヲ舉テ  
日本帝國ニ併合シ以テ時勢ノ要求ニ應スルノ已ムヲ  
得サルモノアルヲ念ヒ茲ニ永久ニ韓國ヲ帝國ニ併合  
スルコトトナセリ

韓國皇帝陛下及其ノ皇室各員ハ併合ノ後ト雖相當ノ  
優遇ヲ受クヘク民衆ハ直接朕カ綏撫ノ下ニ立ケテ其  
ル所ナリ

ノ康福ヲ增進スヘク產業及貿易ハ治平ノ下ニ顯著ナ  
ル發達ヲ見ルニ至ルヘシ而シテ東洋ノ平和ハ之ニ依  
リテ愈其ノ基礎ヲ鞏固ニスヘキハ朕ノ信シテ疑ハサ  
ル所ナリ

朕ハ特ニ朝鮮總督ヲ置キ之ヲシテ朕ノ命ヲ承ケテ陸  
海軍ヲ統率シ諸般ノ政務ヲ總轄セシム百官有司克ク  
朕ノ意ヲ體シテ事ニ從ヒ施設ノ緩急其ノ宜キヲ得以  
テ衆庶ヲシテ永ク治平ノ慶ニ賴ラシムルコトヲ期セ

ヨ

### 三 菅公 その一

延喜元年二月一日、公、京都を發して、太宰府に赴く。從ふ者は、小男と少女と、味酒安行と名づくる一門生とのみ。その子の官にあるもの、處を異にして、盡く流竄せられ、その他、門下郎等、一人も、公に伴へるものなし。夫人女子、亦隨ひ行くを許されず。ただ、敕使藤原眞興等、衛士若干人を率ゐて護送せるのみ。嗚呼、昨は臺閣の寵臣、今は邊陲の遷客。何等の轉變、何等の悲慘ぞや。住み慣れし紅梅殿を出づる時、平生愛せる庭前の梅花を見て、悽惻の情に勝へず、一首を詠じていはく、

こち吹かばにほひおこせよ、梅の花。

あるじなしとて、春なわすれそ。

京を離れて後數日、夫人に送れる歌あり、

君がすむ宿のこずゑを、ゆくゆくも、

かくるるまでに、かへり見しはや。

敕使藤原眞興は、攝津において、公に別れ、右衛門少尉善友益友、衛士二人を率ゐて、筑紫に赴く。當時の太政官の官符を見れば、公は、殆ど純然たる囚人にして、任中、俸を賜ることもなかりしなり。

公の前途や、實に慘憺たりと謂ふべし。かの白樂天が北窓三友を想うて、二十八韻の詩を作りたるは、蓋し、この時なり。中に、自ら、境遇を述べていはく、

自從敕使駆將去、父子一時五處離。  
口不能言眼中血、俯仰天神與地祇。

東行西行雲渺渺、

二月三月日遲遲、

重關警固知聞斷、

單寢辛酸夢見稀、

山河邈矣隨行隔、

風景黯然在路移、

平到謫所誰與食、

生及秋風定無衣、

古之三友一生樂、

今之三友一生悲、

古不同今今異古、

一悲一樂志所之、

字字人の腸を斷つ。行き行きて、河内の國土師の里に到り、道明寺に次る。道明寺は、菅家歷代の寺にして、當時、菅公の姨覺壽尼あり。蓬萍、一たび別るれば、いづれの時を期して相會するを得ん。公、惜別の情を歌うていはく、

鳴けばこそ、わかれをいそげ、鶏の音の、

きこえぬさとの、あかつぎもがな。

播磨の國明石の驛に宿れる一夜、驛長、公を見て、その轉變の甚しきに驚く。公、乃ち、一聯を作りて、自ら慰めていはく、

驛長莫驚時變改、  
一榮一落是春秋。

山河邈たり、行くに隨つて隔り、風景黯然として、路に在つて移る。長亭短亭、幾たびか、公を送迎し、日を積み、月を重ねて、公は、遂に、太宰府の配處に到る。

太宰府の配處は、公にとりて、絶好の詩境なりき。外に、名利の競争なく、内に、危殆の憂悶なし。公や、靜に、往時を懷慕し、現境を思料し、詠歎によりて、その哀情を遣るべきなり。天は、公に授くるに、詩人の天分を以てし、而して、まづ、公に與ふるに、

政治家の境遇を以てしたりき。公の政治家たりしや、煩惱、内に、公を苦め、讒奸、外に、公を陥れ、遂に、公をして、無告の流人たらしめき。然れども悲しいかな、かくの如くなるにあらずんば、公は、遂に、詩人たる能はざりしならん。しかも、公は、死に至るまで、この天分の地に居るを悲み、靜に、春秋の榮落を観じて、何時か、昔日の榮華に歸るあらんことを望みたりき。この憂愁と希望との現るる所に、公の天分は、遂に大成せられたり。而して、公自らは、毫も、これを知らざりしなり。嗚呼、天道の冷酷无情、一に、何ぞ、ここに至るや。

#### 四 菅公 その二

南海の詩  
公が讀岐守た  
りし時の詩。

紀長谷雄  
貞範の子。從三位中納言。文章を以て重んぜらる。(一五〇五年一  
五七二年)一

太宰府における公の詩は、甚だ多からず。然れども、一言一句と雖も、性靈の聲ならざるはなし。文字、時に洗鍊ならず、藻思、必しも巧緻ならずと雖も、眞情、常に、紙面上に汪溢して、公の面目躍如たるを覺ゆ。これを、南海の詩に較ぶれば、意、更に摯實、情、更に痛切、感極るところ、往往、人をして、卒讀に堪へざらしむ。詩も、ここに到りては、徒に、技巧のみにあらざるなり。薨する前、集めて、一巻となし、封緘して、紀長谷雄に送る。長谷雄これを見、天を仰いで歎息せりといふ。今の謂はゆる菅家後集と稱するものこれなり。今、左に、その五六を摘錄せん。

##### 自詠

離家三四月、落涙百千行、

萬事皆如夢、時時仰彼蒼。

都府樓筑前國筑紫郡水城村に、その址あり。觀音寺、同村にあり。西海道敷建の戒壇にて、九州第一の貴寺たり。

これ、後集卷頭の詩なり。公が昨今の轉變眞に、一夢に較ぶべし。その筑紫に在るや、門を杜ぢて、一步も外に出でず。都府樓近しと雖も、纔に瓦の色を望み、觀音寺遠からずと雖も、ただ、鐘の聲を聞くのみ。警吏の門を守るにあらざれども、公、自ら檢束して、遙に謹慎の意を致ししなり。その詩にいはく、

## 不出門

一從謫落シテ在柴荆、萬死兢兢タリ跼蹐情、  
都府樓纔看瓦色、觀音寺只聽鐘聲、  
中懷好逐孤雲去、外物相逢滿月迎、  
此地雖身無檢繫、何爲寸步出門行。

## 聞旅雁

我爲遷客汝來賓、共是蕭蕭旅漂身、  
欹枕思量歸去日、我知何歲汝明春。

重陽の佳節は來れり。しかも、公は唯獨敗屋の下に愁臥するのみ。遙に、去年今夜、清涼に侍せしを憶へば、感慨、何ぞ勝へんや。有名なる、九月十日の絶唱は、實に、この感慨を敍べたるなり。

去年今夜侍清涼、秋思詩篇獨斷腸。

重陽の佳節  
九月九日の節  
供。

恩賜御衣今在此、捧持毎日拜餘香。

十日去つて、十五日來る。月光鏡に似たれども、罪を明にする無く、風氣刀の如けれども、愁を破るに由なし。顏容日に衰へて、千里誰にか訴へん。即ち唱うていはく、

黃萎顏色白霜頭、況復千餘里外投。  
昔被榮華簪組縛、今爲敗謫草萊囚。  
月光似鏡無明罪、風氣如刀不破愁。  
隨見隨聞皆慘慄、此秋獨作我身秋。

罪無くして、この流竄に遇へりと雖も、公は、一度も、君王の不明を恨み、奸臣の讒構を怒りしことあらず。偏に、一身の不遇を歎じて、天命の否塞を悲みたるのみなりき。唯、その身の罪

無くして、汚名を、千歳に遺すは、公の忍ぶ能はざるところなり。故に、公の詩輒もすれば、この事に及ぶ。されど、かくの如き境遇にありて、なほ、君恩を感謝す。亦以て、公の性格の、甚だ高くして、且美なるを見るべきなり。

漢詩の外、公に、和歌の詠あり、又以て、當時の境遇を想ふべし。その四五を、左に錄す。

ある夕、をちかたに、煙のたつを覽て、  
夕されば、野にも山にも、立つけぶり、

なげきよりこそ、燃えまさりけれ。

雲の浮き漂ふを見て、

山わかれ、とびゆく雲のかへりくる。

かげ見る時ぞ、なほたのまるる。

雨のふる日、

あめのした、かわける程の、なければや、

著てしぬれぎぬ、ひるよしもなき。

野をよめる。

つくしにも、紫おふる、野邊はあれど、

なき名かなしむ、人ぞきこえぬ。

延喜三年二月二十五日、公は、かくの如き、慘憺たる事情の下に病歿せり。時に年五十九。京師を出でしより二箇年餘。その墓所を、安樂寺といふ。越えて二年、公の隨臣味酒安行、始めて、神殿を、安樂寺にして、天満大自在天神と稱せり。

安樂寺  
筑前國筑紫郡  
太宰府村、今  
太宰府天滿宮  
のある地。

江州  
支那江西省揚  
子江の南。

かくの如く、太宰府の左遷は、啻に、公をして、その詩人の天分を全うせしめたるのみならず、その人物の上にも、一層の品位を加へしめたるなり。(高山林次郎—菅公傳 第貳回)

## 五 琵琶行

昔、元和十年の秋、白樂天、罪なくして、江州といふ處に流されぬ。その次の年の秋、入江の邊に、夜、友を送りけり。松風波の音を聞くに、愁の涙、いと抑へがたし。

かくて、小夜更けゆくほどに、空澄みわたり、月影、波に随へるを見るにつけても、わが身一つは沈まざりけりと思ひ亂れつつ、人もなぎさを、心ぼそくて歩み行くに、浪の上遙に、琵

は云云  
詞花集、藤原  
顯輔「難波江  
の波間にやど  
る月見ればわ  
が身一つは沈  
まざりけり」。

琶の調、さまざまに聞えて、搔きあはせなどの有様、世に、類な  
きほどなり。これを聞くに、怪しき心抑へがたし。尼人武夫よ  
り外に、誰かは、また、情あるべきとおぼえければ、聲をしるべ  
にて、「誰の人にか」と尋ね問ふに、「われは、これ、商人の妻なり。昔、  
齡十三にて、琵琶を習ひ得たること、世に勝れたりき。帝の御  
前にて、一度調べしに、百の御引出物を賜りき。しかれども、春  
過ぎ、秋暮れて、みめかたち、ありしにもあらず衰へにしかば、  
世に經る力失せはてて、詮方なくなりにしより、商人にとつ  
ぎて、この國の民となれりき。商人、利を重んじて、別を惜むこ  
と、いとあさし。われを懇にせねば、出でいぬる後、立ち歸るほ  
ど久し。歸る程おそれければ、おのづから待たずしもあらず。か

かるままには、唯空しき船を守りつつ、秋の月のすさまじき  
をのみ見る」といへり。

白樂天、「われ、琵琶の聲を聞きて、愁深し。又、この語らひを聞  
くに、取り重ねたる心地す。われも君も、愁の心おなじからず  
や。必ず、その愁の盡きせぬことを思ひ知るべし。われ、いにし  
年の秋より、司を遁れ、都を離れて、ここに沈めり。又、病の席に  
臥して、立ち居ること容易からず、いと物心ぼそきをりに、浪  
風より外に、立ち交る人もなき住處には、蘆の上葉をわたる  
嵐、をちこち人の船よばふ音のみ聞えて、いまだ、樂の聲を聞  
かず。今宵の、君が琵琶の調を聞くに、ほとほと、天の樂を聞か  
むが如し。これを聞く人、皆涙を流せり。その中にも、われ一人、

ことに袂くちぬ」といひけり。

いにしへに、ありへしことを、盡さずば、

袖になみだのかからましやは。

この人は、世の中の人の心の、皆濁れるを憂しとや思ひけむ、一人すまして、常は、都に、迹をなむ留めざりける。(唐物語)

## 六 狂文二篇

### 一、鼠を責むる詞

**偃鼠河に云**  
云  
莊子逍遙遊篇  
に出でたる語。

偃鼠河に飲めども、腹に満つるに過ぎず。汝、なんぞ、わが肉池を飲み乾して、わが印石をして、顔色ながらしむる。夜も明ければ、猫にはめなんか、日が暮れば、おとしにかけんか。地獄お

としか、極樂おとしか。罪の輕重を、枊おとしに計らば、漢の張湯が例なきにしもあらねど、もし白鼠と内縁あらば、大黒殿のおぼしめしもいかがと思ひて、石見銀山一等を許し、鼠衣を剥ぎ、鼠算の過料をとり、壁の穴穴、桁の隅隅、残らず追放するものなり。この趣を、西寺の老鼠より、わか草のはつか鼠にいたるまで、よくよく申し聞すべきものなり。

むらさきの外ににくきは、肉いれの、

朱をうばへる、ねずみいろかな。

(四方赤良—四方のあか)

### 二、上野廣小路蕎麥飯の報條

私家傳蕎麥飯の儀は、嘘八百年來、一子相傳にして、粟の飯

粟の飯云云

唐の盧生が邯

栗の飯云云  
論語に「子曰  
惡紫之奪朱  
也」。

郡の客舍にて、粟の飯を炊く間に、五年の榮華を夢みたりといふ故事。比叡おろし上野の岡に東叡山寛永寺あればいへり。

五十年の夢ぐらゐのことにあるらず。まづ飯椀の蓋をとれば、露をふくめる月の如く、口にいれては、あわ雪の融くるに似たり。さて、やく味と申しても、趣向の智恵をしほり汁、大根おろしに、比叡おろしちりちり散りくる花かつを、鐘は上野か淺草海苔、ないとうがらしの紅は、蓮池になく千鳥味噌、その外、山海のちんぴを集め、あつくぬるくは夏と冬、ひとへに小袖に、御來駕を希ひ上げ奉り候。(手柄岡持—我おもしろ)

## 七 世の中

大嶋蓼太

世の中は三日見ぬまの、さくらかな。

松尾桃青

物言へば、ぐちびるさむし、あきの風。

二 水

今日になりて、菊作らうと、思ひけり。

福岡千代女

千なりや、蔓ひと筋の、こころより。

兒嶋大梅

ふぐ食はぬ、人にはいはじ、鰯の味。

安藤冠里

雪の日や、あれも人の子、樽ひろひ。

澤露川

來年は、來年はとて、くれにけり。

## 八 鉢の木 その一

遠近人の  
伊勢物語「信濃なる淺間の  
嶽に立つ煙を  
ちこち人の見  
やは咎めぬ」。  
おほ井山、  
友の里、離  
れ阪  
信濃國佐久郡。●

「ゆくへさだめぬ道なれば、來し方も、何處ならまし。」僧「これは、一所不<sup>レ</sup>住の沙門にて候ふ。われ、このほどは、信濃の國に候ひしが、餘に、雪深くなり候ふほどに、まづ、この度は、鎌倉に上り、春になり、修行に出でばやと思ひ候ふ。」信濃なる淺間の嶽に立つ煙、遠近人の袖寒く、吹くや嵐のおほ井山、捨つる身になき友の里、今ぞ浮世を離れ坂、墨の衣のうす氷川、下す筏の板鼻や、佐野の渡に著きにけり。

僧「急ぎ候ふほどに、上野國佐野の渡に著きて候ふ。あら笑

うす氷川、  
板鼻  
上野國碓氷郡。  
佐野  
群馬郡。

止や、また、雪の降り來りて候ふ。この所に、宿を借らばやと思ひ候ふ。いかに、この家のうちへ、案内申し候ふ。婦「誰にてわたり候ふぞ。」僧「これは、修行者にて候ふ。一夜の宿を御貸し候へ。婦「やすき御事にて候へども、主人の御留守にて候ふほどに、御宿はかなひ候ふまじ。」僧「さらば、御歸宅まで、これに待ち申さうするにて候ふ。」婦「それは、ともかくもにて候ふ。われらは、外面へいで迎へ、この由を申さばやと思ひ候ふ。夫「ああ、降つたる雪かな。如何に、世にある人の面白う候ふらむ。」それ、雪は、鵝毛に似て、飛んで散亂し、人は、鶴筆を著て、立つて徘徊す」といへり。されば、今ふる雪も、もと見し雪にからねども、われは、鶴筆を著て、立つて徘徊すべき、袂も朽ちて

雪は鵝毛に  
白樂天「雪  
似鵝毛飛散  
亂、人被鵝  
筆立徘徊」。

陸奥のけふ

の  
狹布の里は陸  
中國鹿角郡に  
あり。細布を  
産せしとこ  
る。

袖せばき、細布衣陸奥の、けふの寒さを如何にせむ。あら面白  
からずの雪の日やな。あらおもひ寄らずや、この大雪に、何と  
て、ここにたたずみて、御入り候ふぞ。婦「さん候ふ。修行者の  
御入り候ふが、一夜の御宿と仰せ候ふほどに、御留守の由申  
して候へば、御歸まで御待ちあらうする由仰せ候ふほどに、  
これまでまゐりて候ふ。夫「さては、その修行者は、いづくに  
御入り候ふぞ。婦「あれに御入り候ふ。僧「われらが事にて  
候ふ。まだ、日は高く候へども、あまりの大雪にて、前後を忘じ  
て候ふほどに、一夜の宿を御貸し候へ。夫「易きほどの事に  
て候へども、餘に見苦しきほどに、御宿はかなひ候ふまじ。  
僧「いやいや、見苦しきは苦しからぬことにて候ふ。平に、一夜

山本の里  
上野國群馬郡。

の宿を御貸し候へ。夫「とめ申したくは候へども、われら夫  
婦さへ住みかねたる體にて候ふほどに、なかなか、御宿は思  
ひもよらぬことにて候ふ。これより、十八町ばかりあなたに、  
山本の里とて、よきとまりの候ふ。日も暮れぬ前に、一足も早  
く御いで候へ。僧「さては、しかと御貸しあるまじいにて候  
ふか。夫「御いたはしくは存じ候へども、御宿はまゐらせ難  
う候ふ。僧「あら、曲もなや、よしもなき人を待ち申して候ふ  
ものかな。

婦「あさましや、われら、かやうに衰ふるも、前世の戒行拙き  
故なり。せめては、かやうの人には、値遇申してこそ、後の世の便  
ともなるべけれ。然るべくば、御宿を參らせ給ひ候へ。夫「さ

三輪が崎  
磯城郡。

やうに思し召し候はば、何とて、以前には承り候はぬぞ。いやいや、この大雪に、遠くは御出で候ふまじ。某追ひつき、とめ申さうするにて候ふ。なうなう、旅人、御宿参らせうなう。あまりの大雪に、申すことも聞えぬげに候ふ。御いたはしの御有様やな。もと降りし雪に、道を忘れ、今降る雪に行方を失ひ、一つ所にたたずみて、袖なる雪をうち拂ひ、うち拂ひし給ふけしき、古歌の意に似たるぞや。駒とめて、袖うち拂ふ、かげもなし、佐野のわたりの、雪の夕ぐれ。かやうに詠みしは、大和路や三輪が崎なる佐野の渡、これは、東路の佐野の渡の雪の暮に、迷ひつかれ給はむより、見苦しく候へども、一夜はとまり給へや。「げにこれも旅の宿、かりそめながら值遇の縁、一樹の蔭

の宿も、この世ならぬ契なりけり。それは雨の樹蔭、これは雪の軒ふりて、うき寢ながらの草枕、夢より霜や結ぶらむ。

### 九 鉢の木 その二

夫「いかに申し候ふ。御宿は申して候へども、なににても候へ、まゐらせうずるものなく候ふはいかに。婦「折節」これに、粟の飯の候ふほどに、苦しからずばまゐらせ候へ。夫「さらば、そのよし申し候ふべし。いかに申し候ふ。御宿をばまゐらせて候へども、なににてもあれ、參らせうずる物もなく候ふはいかに。をりふしこれに、粟の飯の候ふ。苦しからずばきこしめされ候へ。僧「それこそ、日本一のことにて候へ。賜ひ候

へ。夫「なう、きこしめされうずると仰せ候ふ。いそぎてまる  
らせ候へ。婦「心得申し候ふ。婦惣じて、この粟と申すもの  
は、いにしへ、世にありし時は、歌に詠み、詩に作りたること承  
り候へ。今は、この粟をもて、身命をつき候ふ。げにや、盧生が見  
し、榮華の夢は五十年、その邯鄲の假枕、一炊の夢の覺めしも、  
粟飯を炊ぐほどぞかし。あはれやげに、われもまた、しばしな  
りともうちも寝て、夢にも昔を見るならば、慰むこともある  
べきになう、御覽ぜよ、かほどまで、「住みうかれたる故郷の、  
松風寒き夜もすがら、寝られねば夢も見ず。なにおもひでの  
あるべき。

夫「夜の更くるについて、次第に寒くなり候ふ。何をがな、火

に焚いて、あて參らせ候ふべき。や、思ひいだしたることの候  
ふ。鉢の木を持ちて候ふ。これを切り、火に焚いて、あて申し候  
ふべし。僧「げにげに、鉢の木の候ふよ。夫「さん候ふ。某、世に  
ありし時は、鉢の木を、數多持ちて候ひしを、かやうの體にま  
かりなり、いやいや、木數寄も、無用と存じ、皆、人にまゐらせ候  
ふ。さりながら、今も、梅、松、櫻を持ちて候ふ。あの雪持ちたる木  
にて候ふ。某の祕藏に候へども、今夜の御もてなしに、これを  
焚き、あて申さうするにて候ふ。僧「いやいや、御志はありが  
たう候へども、自然御こと、世に出で給はむ時の御慰にて候  
ふ間、なかなか思ひも寄らぬことにて候ふ。「いや、とてもこ  
の身は埋木の、花咲く世にも逢はむこと、今この身にてはあ

の花さくこと  
もなかりしに  
みのなるは  
てぞ哀なりけ  
る。」

## 法の薪

釋迦、雪山にて、薪水の勞を執りて、仙人に仕へしをいふ。

## 雪山

北天竺にあり。

## 窓の梅の云

和漢朗詠集、晉敦茂「窓梅北面雪封寒」。

## 見じといふ

晋家後集、「山里の折かけ垣の梅の花いかなる人の見じといふらむ。」

りがたし。ただ徒なる鉢の木を、御身のために焚くなれば、これぞ、まことに、難行の法の薪とおぼしめせ。

婦「しかも、この程雪ふりて、夫「仙人に仕へし雪山の薪、僧「かくこそあらめ。夫「われも身を、「捨人の爲の鉢の木切るとても、よしや惜しからじと、雪うち拂ひて見れば、面白や、いかにせむ。まづ冬木より咲きそむる、窓の梅の北面は、雪封じて寒きにも、異木よりもまづ先だてば、梅を切りや初むべき。見じといふ人こそうけれ、山里の折かけ垣の梅をだに、情なしと惜みしに、今更薪になすべしとかねて思ひきや。櫻を見れば春ごとに、花すこし遅ければ、この木やわぶると、心をつくし育てしに、今はわれのみわびて住む家櫻、きりくべて、

かかり  
蹴鞠の庭ない  
ふ。松を植う  
るは、故實なり。

## や。

ひ櫻になすぞ悲しき。さて、松はさしもげに、枝をため葉をすかして、かかりあれと植ゑ置きし、そのかひ今はあらし吹く、松はもとより煙にて、薪となるもことわりや。切りくべて、今ぞ御垣守、衛士の焚く火はお爲なり。よく寄りてあたり給へや。

僧「近頃、よき火にあたり、寒さを忘れて候ふ。いかに申し候ふ。主人の御名字をば、何と申し候ふぞ。承りたく候ふ。夫「いや、某は、名字もなき者にて候ふ。僧「何と仰せ候ふとも、ただ人とは見え給はず候ふ。自然の時の爲にて候ふ。何の苦しう候ふべき。御名字を御名告り候へ。夫「この上は、何をかつつみ候ふべき。これこそ、佐野源左衛門常世がなれる果にて候

御垣守云云

詞花集、大臣能宣「御垣

守衛士のたゞ

火のよるはも  
え晝はきえつ  
つ物をこそ思  
へ。」

へ。僧「それは、何とて、かやうの、散散の體には御成り候ふぞ。夫「そのことに候ふ。一族どもに押領せられ、かやうの身となりて候ふ。僧「なう、それは、なにして、鎌倉へ御のぼり候うて、御沙汰にはいたされ候はぬぞ。

最明寺殿  
北條時頼。(一  
八八七年)  
九二三年)

常世「運のつくる所は、最明寺殿さへ、御修行に御出のうへはと思ひ候ふ。かやうにおちぶれて候へども、御覽候へ、これに、武具一領、長刀一枝、また、あれに、馬を一匹つないで、持ちて候ふ。これは、ただいまにもあれ、鎌倉に、御大事あらば、ちぎれたれども、この具足とつて投げかけ、鋸びたれども、長刀を持ち、瘦せたれども、あの馬に騎り、一番に馳せ参じ、著到につき、さて、合戦はじまれば、敵大勢なりとても、一番に破つて入り、お

ただたのめ  
云云  
新古今集に、  
清水觀音の歌  
とて「なほ頼  
めしめぢが原  
のさしも草わ  
れ世の中にあ  
らむ限は」。

もふ敵と寄り合ひ、打ち合ひて、死なむこの身の、このままならばいたづらに、飢につかれて死なむ命、なんぼう無念のこと候ふぞ。僧「よしや身のかくてははてじ。ただたのめ。われ、世の中にあらむほど、またこそまゐり候はめ。いとま申して、いづるなり。婦「名殘惜しの御事や。はじめはつつみしわが宿の、さも見ぐるしく候へど、しばしはとまりたまへや。僧「どまる名残のままならば、さて幾度かゆきの日の、婦「空さへ寒きこの暮に、僧「いづこに宿をかり衣、婦「常世「今日ばかりとまりたまへや。僧「名残は宿にとまれども、いとま申して、常世「御いでか。僧「さらばよ常世。婦「また御入り。僧「自然、鎌倉へ御のぼりあらば、御たづねあれ。希有がる法師なり。か

ひがひしくはなけれども、公方の縁になり申さむ。御沙汰捨てさせたまふな。といひすべて、出舟の、ともに名残やをしむらむ。

### 一〇 鉢の木 その三

東八箇國  
相模、武藏、  
安房、上總、  
下總、常陸、  
上野、下野。

常世「いかにあれなる旅人、鎌倉へ、勢の上るといふはまことか。なにおびただしく上る。さぞあるらむ。東八箇國の大名小名、おもひおもひの鎌倉いり、さぞ見事に候ふらむ。白金打ちたる絲毛の具足に、金銀を展べたる太刀かたなかひに飼うたる馬に騎り、騎替、中間きらびやかに、うちつれ、うちつれのほる中に、常世が、常にかはりたる馬物具や、打物の、物そのもの

のにあらざる氣色、さぞ笑ふらむ。さりながら、所存は、たれにも劣るまじと、心ばかりはいさめども、勇みかねたる瘦馬の、あら、道おそや。「いそげども、よわきによわき柳の絲の、よれによれたる瘦馬なれば、うてども、あふれども、さきへは前まぬ足弱車の、のり力なければ、追ひかけたり。(中略)

下部「いかに申し候ふ。常世「何事にて候ふぞ。下部「上意にて候ふ。急いで、御前にまゐり候へ。常世「なに、某に、御前へまゐれと候ふや。下部「なかなかのこと。常世「あら、思ひ寄らずや。これは、定めて、人ちがひにて候ふべし。下部「いやいや、そなたのことにて候ふ。その仔細は、諸軍勢の中に、いかにも見苦しき武者をつれてまゐれ」との上意に候ふが、見申せば、その方ほど

見苦しき武者も候はぬ程に、さて申し候ふ。急いで御まゐり候へ。常世「さては、某にて候ふべし。畏り候ふ」と御申し候へ。實に、これも心得たり。某が敵人、謀叛人と申し上げ、御前へ召しいだされ、頭を刎ねられむためな。よしよし、それも力なし。いで、御前にまゐらむ。

と、大牀として見渡せば、今度の早打にのぼりまゐれる兵、きら星の如く竝み居たり。さて、御前には諸侍、その外數多人竝み居つゝ、目をひき指をさし、笑ひあへるその中に、横縫のちぎれたる古腹巻に、鎧長刀やうやうに横たへ、わるびれたる氣色もなく、まゐりて御前にかしこまる。

時頼「やあ、あれなるは、佐野の源左衛門常世か。これこそ、いつ

ぞやの大雪に、宿かりし修行者よ、見忘れてあるか。いで、汝、佐野にて申ししよな、今にてもあれ、鎌倉に、御大事あらば、ちぎれたれども、その具足取つて投げかけ、鎧びたれども、その長刀を持ち、瘦せたれども、その馬に騎り、一番に馳せ参づべきよし申しつる言葉の末を違へずして、參りたるこそ神妙なれ。まづまづ、今度の勢使、全く、餘の儀にあらず、常世が言葉の末、眞か偽か知らむ爲なり。又、當參の人人も、訴訟あらば申すべし。理非によりて、その沙汰いたすべきところなり。まづまづ、沙汰のはじめには、常世が本領佐野の庄三十餘郷、返し與ふるところなり。又、何よりも切なりしは、大雪ふりて寒かりしに、祕藏せし鉢の木を切り、火に焚き、あてし心をば、いつの

梅田 河北郡。  
櫻井 下新川郡。  
松枝 碓氷郡松井田町。  
安堵に 本領安堵の御教書になり。

世にかは忘るべき。いで、その時の鉢の木は、梅、櫻、松にてありしよな。「その返報に、加賀に梅田、越中に櫻井、上野に松枝、あはせて三箇の庄子子孫孫にいたるまで、相違あらざる自筆の状、安堵に取りそへたびければ、常世は、これを賜りて、三度頂戴仕り、常世「これ見たまへや、人人よはじめ笑ひし輩も、これ程の御氣色、さぞ羨しかるらむ。

「さて、國國の諸軍勢、みな御暇たまはり、故郷へとぞ歸りける。その中に常世は、喜の眉を開きつつ、今こそいさめ、この馬にうち騎りて、上野や佐野の舟橋、取り放れし本領に安堵して歸るぞうれしかりける。(謡曲集)

## — 西洋文藝復興と明治の盛代

世界の過去には、わが國の今日に勝る時代ありしかといふに、支那、印度、波斯、埃及の古代文明、希臘、羅馬以來三千年の歐羅巴の文明にも、今日に比すべきは、今を隔つる四五百年前の名高き西洋文藝復興時代唯一つあるのみ。こは、歐羅巴太古の文明が、希臘に起源して、羅馬に移り、その帝政時代に、盛極りて衰頽し、竟に、今の日耳曼諸族に滅さるるに至つて、歐羅巴全土が、戦國となり、學藝は廢れ、制度は紊れ、武力これ正義の暗黒時代となりしこと、およそ七百年、氣運、漸く熟し、秩序、茲に生じ、長夜の闇を破りたる大日輪の如くに、新しき文明の成り出でたる時代なり。

譬を以ていはば、この時代は、わが元祿享保の武家文明に、王朝文明の粹をあはせ、更に、明治維新の活動を加へ、これを、歐羅巴大になしたりといふべき、目覺しき時代なり。帝王、侯伯、法王、僧官等の暴横も、この時より、漸く減じ、今までには、社會は、貴賤の二階級に區別せられたりしに、上流社會と下等社會との間に、商人工人の中等社會興り、平民參政の端緒も發け、學藝の研鑽、剩す隈もなく、今の所謂科學も、この際はじめたる活版術は、忽の間に發達して、新思想新現象を、八面に傳播し、羅針盤の發明は、航海を容易にし、コロンブスは、米の大陸を發見し、ザアズは、亞非利加を廻り、バスク、ダ、ガマは、印

マガリアエンス  
葡萄牙の航海  
家。マガリア  
エンス海峡の  
發見者。(二一  
八年—二二  
八年)

コペルニクス  
波蘭の星學  
者。その著天  
體循行論は、  
近世星學の基  
礎なり。(二一  
三年—二二  
三年)

度に直航し、マガリアエンスは、世界を一周せり。時の歐羅巴人は、既に、學藝の復興によつて、智情の新天地を得て、精神界の自由を享樂したりしに、今や、亞米利加大陸を得、南洋の諸嶋を得、亞細亞、亞非利加との交通をも自由にすることを得て、物質的にも、一の新天地を見出したるなり。

この時に當つて、學者には、コペルニクスといふ巨人出でて、新に、地動説を唱へ、地球を、宇宙の中心とする舊説を破りて、人心の謬蒙を發きしかば、暴横なる羅馬法王の威信、漸くゆらぎ、偉人ルーテル出でて、宗教の改革を唱ふるや、天下の大勢は、靡然として、これに向ひ、王侯僧侶の壓制に苦みて、天道の是非を疑ひ、意氣銷沈し、厭世悲觀に流れたりし國民も、

ここに、意志の自由を得て、自立の志を起し、進取の勇を發し、現世間に活動して、性の最善を盡さんと力むるに至りたり。希臘亡びて以來、かばかり、現世を樂觀し、自力を恃みて活動せし時代は無し。

しかしながら、かかる目覺しき西洋文藝復興も、わが明治の現代より見れば、必しも羨むには及ばず。何となれば、今日の日本は、かの時代に、歐羅巴諸國が獲たる、あらゆる文明の要素を、十七八世紀の烹熟を経、佛蘭西革命の大刷新を經、鐵と蒸氣と進化論とを普及したる十九世紀の新發展を経て、殆ど悉く攝取するを得たればなり。もし、西洋文藝復興を、歐羅巴大といふべくば、これは、世界大の文明といひつべし。黒

船、始めて、下田に入りて、北米合衆國の使命を齎ししより、およそ五十年、わが國は、その間に、歐羅巴が、文藝復興以来に醸し成したる、あらゆる文明を吸收せり。これよりさき、東洋は、周以來、隋唐、元明に及ぶ、支那の文明と、印度の文明とを吸收し、王朝文明と武家文明とを経て、渾然たる一大特色ある日本文明をつくり得たりしところに、猛然として、歐米の文明が侵入し來りたるなれば、恰も、これ、東西兩大洋の海嘯が、日本海口に衝突し、天を拍つて碎け下り、陸地に逆つて、港市漁村を一掃し、山の頂と海の面とを一つらにし、無數の樹木、家屋、人畜を、濁浪に漂はせ、今なほ、東西に奔盪して、定るところを知らざるが如し。眞に、空前の壯觀なり。

龍もし、雲を得て、始めて飛揚すべく、獅子もし、曠野に出でて、始めて、奮迅の勢を逞しうするを得べくば、現代こそは、英俊の士の爲すあるべき時代たるは勿論、庸劣の人も、また、時勢に驅られて、何等かの天分を遂げ得べき時機なりといふべけれ。今日、うまれ甲斐ある人となり得ざる者は、他の時にうまれては、何事をか能くせん。古今東西の文明の精粹は、今や、盡く、わが眼前に湊り、これを利用する自由は、各人の心の儘なり。志を立てて、事に従はんとするに當つて、便宜の多きこと、過去には、今日に比すべきなし。さはある、われに、便宜の多きと同じく、あらゆる人にも、便宜多く、隨つて、競争の激烈なることも、舊時代の比にあらねば、懦弱庸劣なる者の忽に

追ひ落され、抛げ出されて、悲運に陥るを免れざることも事實なれど、そは、已むを得ざる所なり。かかる便宜なる時代にうまれあひながら、その一身をだに立て得ざるは、概ね、その人自身の罪なり。世を怨み、人を怨みんは誤れり。坪内雄藏

## 一一 重盛諫言 その一

太政入道  
清盛をいふ。  
一時に、年六  
十。

太政入道は、かやうに、人人、數多いましめ置いても、なほ心ゆかずや思はれけむ、既に、赤地の錦の直垂に、黒絲緘の腹巻の、白金物打つたる胸板せめ、先年安藝守たりし時、神拜のついでに、靈夢を蒙つて、嚴嶋大明神より、現に賜られたりける、銀の蛭巻したる小長刀、常の枕を放たず立てられたりしを、

脇にはさみ、中門の廊にぞ出でられたる大方、その氣色ゆゆしくぞ見えし「貞能」と召す。

**貞能**  
家貞の子。後剃髪して、世に肥後入道と稱す。

**平右馬助**  
清盛の叔父忠正。  
**新院**  
崇徳上皇。  
**一宮**  
崇徳上皇の皇子重仁親王。  
**故刑部卿**  
清盛の父忠盛。(一七五六年一八二三年)  
**故院**  
鳥羽法皇。  
**院**  
後白河上皇。

筑後守貞能は木蘭地の直垂に緋纈の鎧著て、御前に畏つてぞ候ひける。入道宣ひけるはいかに貞能、この事、いかが思ふぞ。保元に平右馬助を始として、一門なれば過ぎて、新院の御方に参りにき。一宮の御事は、故刑部卿殿の養君にてましまししかば、かたがた見放ち参らせ難かりしかども、故院の御遺誠に任せて、御方にて、先をかけたりき。これ一つの奉公。次に平治元年十二月、信頼、義朝が謀叛の時、院内を取り奉つて、大内に立て籠り、天下くらやみとなりしにも、入道、隨分、身を捨てて、兎徒を追ひ落し、經宗、惟方を召しいましめしに至

内  
二條天皇。

經宗  
藤原氏、左大臣に至る。(一七八五年一一八四五年)

西光  
藤原氏、名は師光。(一八三七年)

北面  
北面の武士、院の御所侍衛の武官。

るまで、君の御爲に、既に、命を失はむとすること、度度に及ぶ。されば、人、何と申すとも、いかでか、この一門をば、七代までは思し召し、すてさせ給ふべき。それに、成親といふ、無用のいたづら者、西光と申す、下賤の不當人が申すことに、君のつかせ給ひて、ややもすれば、この一門滅さるべき由の御結構こそ、然るべからね。この後も、讒奏する者あらば、當家追討の院宣を下されつと覺ゆるぞ。朝敵となつて後は、いかに悔ゆとも、益あるまじ。暫く、世を鎮めむほど、法皇をば、鳥羽の北殿へ移し参らするか、さらば、これへまれ、御幸をなし参らせむと思ふはいかに。その儀ならば、定めて、北面の者どもが中より、矢をも、一つ射むずらむ。その用意せよと、侍どもに觸るべし。

大方は、入道院方の奉公思ひ切つたり。馬に鞍おかせよ、きせなが取り出せ」とこそ宣ひけれ。

小松殿  
平重盛。一時  
に年四十。

法住寺殿  
京都下京區瓦  
町、三十三間  
堂の東にあり  
き。

主馬判官盛國、急ぎ、小松殿へ馳せ参つて、世ははや、かう候ふと申しければ、大臣、聞きもあへたまはず、嗚呼、はや、成親卿の首の刎ねられたんなと宣へば、その儀にては候はねども、入道殿の御きせながを召され候ふ上は、侍どもも、皆打ち立つて、只今、院の御所法住寺殿へ寄せむとこそ出で立ち候ひつれ。暫く、世を鎮めむ程、法皇をば、鳥羽の北殿へ遷し参らするか、然らずば、これへまれ、御幸をなし参らせうとは候へども、内内は、鎮西の方へ流し参らせむとこそ議せられ候ひつれと申しければ、大臣、何によりて、只今、さる事のおはすべき

とは思はれけれども、「今朝の禪門の氣色、さる物狂しきこともやおはすらむ」とて、急ぎ、車を飛ばせて、西八條殿へぞおはしたる。

門前にて、車より下り、門の中へさし入りて見給ふに、入道、腹巻を著給ふうへ、一門の卿相雲客數十人、各、色色の直垂に、思ひ思ひの鎧著て、中門の廊に、二行に著せられたり。その他、諸國の受領、衛府、諸司などは、縁に居こぼれ、庭にも、ひしと並み居たり。旗竿ども引きそばめ、馬の腹帶をかため、胄の緒をしめ、只今打ち立たむずる氣色どもなるに、小松殿、鳥帽子、直衣に、大紋の指貫のそば取つて、さやめき入り給へば、ことの外にぞ見えられける。

五戒  
不殺生戒、不  
偷盜戒、不邪  
淫戒、不妄語  
戒、不飲酒戒。

入道、ふしめになつて、あはれ、例の、内府が、世をへうずる様に振舞ふものかな。大きにいさめばやと思はれけれども、流石子ながらも、内には、五戒を保つて、慈悲を先とし、外には、五常を亂さず、禮義を正しうし給ふ人なれば、あの姿に、腹巻を著てもかはむこと、流石おもはゆう、はづかしうや思はれけむ、障子を、少し引き立てて、腹巻のうへに、素絹の衣を、あわて著に著給ひたりけるが、胸板の金物の、少し外れて見えけるを隠さうと、頻に、衣の胸を引き違へ、引き違へぞし給ひける。大臣は、舍弟宗盛卿の座上につき給ふ。入道宣ひ出さるることもなく、大臣も、また、申し上げらるる旨もなし。

### 一三 重盛諫言 その二

ややあつて、入道宣ひけるは、「成親卿が謀叛は、事の數にも候はず、一向、法皇の御結構にて候ひけるぞや。暫く、世を鎮めむ程、法皇をば、鳥羽の北殿へ遷し参らするか、然らずば、これへまれ、御幸をなし参らせむと思ふはいかに」と宣へば、大臣、聞きもあへ給はずはらはらとぞ泣かれける。入道、「さていかにやいかに」と呆れ給へば、ややあつて、大臣、涙を抑へて、「この仰承り候ふに、御運は、はや、末になりぬと覺え候ふなり。又、御有様を見参らせ候ふに、更に、現とも覺え候はず。流石、わが朝は、邊地粟散の境とは申しながら、天照大神の御子孫、國の主として、

邊地粟散  
小國を稱す。  
楞嚴經に、「粟  
散卽小國、小  
主散天下。如  
粟多也」。

天兒屋根命の御末、朝の政を掌らせ給ひしよりこのかた、太政大臣の官に至る人の、甲冑をよろふこと、禮儀にそむくにあらずや。就中、出家の御身なるに、法衣を脱ぎ捨てて、忽に、甲冑をよろひ、弓箭を帶しましまさむこと、内には、破戒無慙の罪を招くのみならず、外には、仁義禮智信の法にもそむき候ひなむすがたがた、恐ある申しごとにて候へども、心の底に、旨趣を残すべきにも候はず。まづ、世に、四恩候ふ、天地の恩、國王の恩、父母の恩、衆生の恩これなり。その中に、最も重きは朝恩なり。普天の下、王土に非ずといふことなく、率土の濱、王臣に非ずといふことなし。されば、かの頴川に、耳を洗ひ、首陽山に、蕨を折りし賢人も、敕命の背き難き禮儀をば存知すとこ

普天の下云  
詩經に、「普天之下莫非三王土、率土之濱莫非三王臣」。

首陽山に云  
伯夷叔齊の故事。

蓮府、槐門  
大臣の邸をいふ。蓮府は、齊の王儉の故事に出て、槐門は、周代三槐を朝廷に植ゑ、三公これに面して座せしに本づく。

神は非禮云  
禮記に、「神不<sub>レ</sub>享<sub>レ</sub>非禮也」。

そ承れ。いかにいはむや、先祖にも、いまだ聞かざりし太政大臣を極めさせ給ふ。所謂、重盛が無才愚暗の身を以て、蓮府槐門の位に至る。しかのみならず、國郡半は、一門の所領となつて、田園盡く、一家の進止たり。これ、希代の朝恩にあらずや。今これらの大御恩を思し召し忘れさせ給ひて、みだりがはしく、法皇を傾け參らせ給はむこと、天照大神、正八幡の神慮にも背かせ給ひ候ひなむす。それ、日本は神國なり。神は、非禮を受け給ふべからず。この一門が、代代の朝敵を平げて、四海の逆浪を鎮めしことは、無雙の忠なれども、その賞に誇ることは、傍若無人とも申しつべし。然れども、當家の運命、いまだ盡きざるによりて、事既に露れ候ひぬ。その上、仰せあはせ

らるる成親卿を召し置かれぬる上は、たとひ、君、如何なる不思議を思し召し立たせ給ふとも、何の恐か候ふべき。所當の罪科行はれぬる上は、退いて、事の由を陳じ申させ給ひて、君の御爲には、愈、奉公の忠勤を盡し、民の爲には、益、撫育の哀憐を致させ給はば、神明の加護に預つて、佛陀の冥慮に背くべからず。神明佛陀、感應あらば、君も思し召し直すことなどか候はざるべき。

千顆萬顆云

これは、尤も、君の御理にて候へば、叶はざらむまでも、院中を守護し参らせ候ふべし。その故は、重盛はじめ、敍爵より、今、大臣大將に至るまで、しかしながら、君の御恩ならずといふことなし。この恩の重きことを思へば、千顆萬顆の玉にも超

え、その恩の深き色を按するに、一入再入の紅にも、なほ過ぎたらむ。然らば、院中に参り籠り候ふべし。その儀にて候へば、重盛が身に代り、命に代らむと契りたる侍ども、少少候ふらむ。これらを召し具して、院の御所法住寺殿を守護し参らせ候はば、流石、以ての外、御大事でこそ候はむずらめ。悲しきかな、君の御爲に、奉公の忠を致さむとすれば、迷盧八萬の頂よりも、なほ高き、父の恩、忽に忘れむとす。痛しきかな、不孝の罪を逃れむとすれば、君の御爲には、すでに、不忠の逆臣となりぬべし。進退、これ谷れり、是非、いかにも辨へ難し。申し受くる所詮は、ただ、重盛が首を召され候へ。その故は、院參の御供をも仕るべからず、又院中をも守護し参らすべからず。

和漢朗詠集、  
昔原文時、「瑩  
風瑩」日、高  
低千顆萬顆之  
玉、染枝染、  
波、表裏一入  
再入之紅」。

迷盧八萬の  
頂

迷盧は蘇迷盧  
の略。須彌山  
のこと。高さ  
八萬由旬あり  
といふ。

富貴といひ、榮華といひ、朝恩と申し、重職といひ、旁極めさせ給ひぬれば、御運の盡きむこと難かるべきにあらず。『富貴の家には、祿位重疊せり。再び實なる木は、その根必ず傷む』と見えて候ふ。心細うこそ候へ。いつまでか、命生きて、亂れむ世をも見候ふべき。ただ、末代に、生を受けて、かかる憂き目にあひ候ふ重盛が果報の程こそ拙う候へ。只今も、侍一人に仰せ付けられ、御壺の内へ引き出されて、重盛が頭を刎ねられることは、いと易い御事でこそ候はむずらめ。これを、各聞き給へて、直衣の袖も絞るばかりに、かきくどき、さめざめと泣き給へば、その座に竝み居給へる、平家一門の人々、皆、袖をぞ濡されける。(平家物語)

## 一四 朗詠數則

早春

都 良 香

氣霽レテハ風新柳ノ髪ヲ梳リ、氷消エテハ浪舊苔ノ  
鬚ヲ洗フ。

橘 在 列

松根ニ倚ツテ腰ヲ摩レバ千年ノ翠手ニ満チ、梅花ヲ  
折ツテ頭ニ挿メバ二月ノ雪衣ニ落ツ。

首夏

白 樂 天

甕頭ノ竹葉ハ春ヲ經テ熟シ、階底ノ薔薇ハ夏ニ入ツ

テ開ク。

納涼

源英明

池冷ウシテ水ニ三伏ノ夏ナク、松高ウシテ風ニ一聲  
ノ秋アリ。

八月十五夜

紀長谷雄

本三月  
今年ノ國ハハル三勝ニアレ  
ハアマサヘミルキムレウノイ  
船ノハナヲ  
ムカヒキ

十二廻ノ中コノ夕  
ノ好ニ勝ルハナク、  
千萬里ノ外各ワ  
ガ家ノ光ヲ爭フ。

劉元叔

北斗ノ星ノ前ニ旅雁横タハリ、南樓ノ月ノ下ニ寒衣  
ヲ擣ツ。

雁

蘭

兼明親王

扶桑豈影無カラシヤ、浮雲掩ウテ忽ニ昏ク、叢蘭豈芳

シカラザランヤ、秋風吹イテマヅ敗ル。

山水

大江澄明

山復山、イヅレノ工カ青巖ノ形ヲ削リ成セル、水復水、

誰ガ家カ碧潭ノ色ヲ染メ出セル。

將軍

源順

雄劔腰ニ在リ、拔クトキハ則チ秋霜三尺、雌黃口ヨリ  
ス、吟ズレバ亦寒玉一聲。

帝王

紀淑望

仁ハ秋津洲ノ外ニ流レ、惠ハ筑波山ノ陰ヨリモ茂ク、

浦變ジテ瀨トナル聲寂寂トシテ口ヲ閉ヂ、砂長ジ  
テ巖トナル頌洋洋トシテ耳ニ満テリ。

### 一五 わが國の繪畫

日本畫と西洋畫とは、漸次混融して、その區劃も明瞭ならざるに至るが如しといへども、この兩者の純粹なるものを比較すれば、各自の特色は、なほ、甚だ顯著なり。ただに、絹紙と彩具との相違のみならんや、その用意、筆法等において、皆然り。かれにあつては、藝術は、科學と並行し、理性は、想像の衝となりて、遠近明暗、力めて、自然に背かざらんことを期し、これにあつては、文化の精神的方面、獨、まづ進み、筆を揮ふもの、感

興に乗じて、腦裏の印象を瀉ぎ出す。かれは、色彩を旨とし、これは、描線を重んじ、かれは、實相のとほりに、空氣の色をも漏すことなく、これは、主體の外は、生地のままに存す。一は濃艶、一は瀟洒、一は、輪奐たる樓臺に、顯官が、客を延くが如く、一は、幽閑なる茅屋に、高士が、梅を愛するに似たり。これらの差別は、蓋し、その初よりして然りしにあらず、各自獨立したる歴史が、漸次に養成したるものにして、今はた、兩洋交通の歴史によりて、これを合一せんとする傾向あるなり。

わが國の文藝における佛教の感化の甚深なることは、多言を要せず。眞の美術の歴史といふは、聖德太子の佛教興隆に始り、爾來、進歩劇甚、以て、偉大なる奈良朝に及べり。されど、

巨勢金岡  
巨勢家の祖。  
清和、陽成、光  
孝宇多、醍醐  
の五朝に歴仕す。

この時代も、彫塑においてこそ、千古無比の名を博すべけれ、繪畫の歩調は、いまだ、これに伴はず。平安時代に、巨勢金岡が、出でし頃より、漸く、丹青全盛の世は來れるなり。而して、奈良時代の彫塑が、なべて佛像なるが如く、平安時代の繪畫も、概して、佛畫の外に出でず。按ふに、平安時代の如く、形式美を偏重したる時代は、他に、類例を見ず。佛教も、亦、形相の具足によりて、内心の信仰に近づくべしとしたり。法成寺、法勝寺の如き、今、廢墟をだに存せざれども、金堂、講堂、七寶壯嚴、天を摩する大塔、虹と曳く廻廊、すべて、一代の工を盡しし状態は、歴史の傳ふるところ、今に存する鳳凰堂を見ても、その一端を覗ふべし。香煙、徐に薰じて、幢幡を掠め、蓮華、頻に散つて、轉讀に想見するに足る。

鎌倉時代の繪卷物も、また、日本繪畫の精華なり。平治物語繪等は、源平鬪争の慘状を寫し、圓光大師畫傳等は、新佛教勃興の機運に從ふ。いづれも、時代の反映にして、又、不朽の逸品

たるを失はざれども、内容外形、共に、根本の變化を受けたるは、實に、東山時代の繪畫にして、僧雪舟等、その代表者たり。この革新は、禪宗の提撕によりて成り、鎌倉時代に、この宗の傳來せしより、漸く養ひ來れる勢力の、ここに、頂點に達したるものにして、香茶の技と、榮枯を共にせり。そもそも、平安時代の佛寺を去つて、禪刹の門をくぐるや、彼此、別天地の感なくんばあらず。結跏趺坐して、寂靜の境に入れば、物の美醜も、眼を遮らず。一旦、その道に悟入すれば、經典佛像、何の要かあらん。教外別傳といひ、以心傳心といひ、精神を主として、形體に泥まず。例へば、能樂に、何等の背景を設けずして、しかも能く、雲煙萬里の情趣を偲ばしむるが如し。繪畫も、これに同じく、

色を棄てて、筆に託し、巧を抛ちて、氣を驅り、蒼枯にして恬澹、破墨一掃して、遠山を産み、秃筆數行にして、樹石を刻む。一見すれば兒戯、熟視すれば神工、益味うて、益趣あり。恍惚として、われ、我を忘る。即ちこれ、東山時代の特色にして、流風餘韻、延いて、近代に及べり。

桃山時代は、豪華の氣、一世を蓋ひ、繪畫も、やや移りて、雄大穠麗の風を喜べども、いまだ、東山の根據を衝くに及ばざりき。江戸時代に至つて、幕府が、消極の方針は、更に、その規模を縮めて、枯淡の域に歸らしめ、門閥の貴に誇れる狩野住吉も、先人の糟粕を嘗むるのみ。元祿の盛時には、裝飾に傾ける光琳、滑稽の才ある一蝶あり。菱川師宣以來の浮世繪が、時勢粧

光琳  
尾形氏、名は  
方況。京都の  
人。(二三二二)

を寫して、山水花鳥以外に、題目を求めたるは、最も注意すべきと雖も、鄙俗に流れて、遂に、高尚なる趣味に應ずる能はず。大雅等の文人畫は、東山の繪畫に比するに、全然別種のものに屬すれども、匠氣を忌み、形似を疎にし、氣韻生動を以て、第一義とするところは、即ち相似たり。應舉等の寫生畫は、自然の摸寫に力めて、別に、一流を立てたるものなれども、また、清淡洒脱の習を脱するを得ず。訥言が創めたる土佐古風、容齋が好める歴史畫の如きは、即ち、學界における、國學の興隆に齊しく、また、時勢の反響なり。但、これは、かれの如き價値なきを憾とするのみ。一派また一派、各、盛衰の數を免れざりしが、いまだ、その間に崛起して、斯道の根本的革新に成功せるも

**一蝶**  
英一蝶といふ。大坂の人。  
(二三二二年)  
(二三八四年)  
**菱川師宣**  
安房の人、友竹と號す。正徳中歿す。

**大雅**  
池氏、名は無名、字は貸成。京都の人。  
(二三八三年一二四三六年)  
**應舉**  
圓山氏、丹波の人。京都に住す。  
(二三九三年一二四五五年)

**訥言**  
田中氏、名は痴。京都の人、法橋に敍せら

る。(一二四八年)  
**容齋**  
菊池氏、名は武保。多く南朝忠孝の士を薦く。  
(二四四年一二五八年)

畫史

## 一六 玉づさ四篇

### 一、小澤蘆庵主のもとに

千さとをへたで侍れど、ここのとし月、まのあたりかたらひかはし侍る心ちせらるるままに、うちつけなるものから、たちかへる春のほぎこと聞え侍り。

君もわれも、もも世をへつつ、花鳥に、

あくやあかずや、いざこころみむ。

「物みなは」とか。む月六日の日。(加藤千蔭)

物みなは  
萬葉集、詠者  
不詳「物皆は  
新しきよした  
だ人はふりぬ  
るのみぞよろ  
しかるべき」。

二、人の氷をおくれるに

「つちさへ裂く」とかいふなるは、暮まつほども、いと待遠なるに、折しも、やむごとなきあたりより、わかつち給へるなりとて、暑さ忘れむ料にて、賜れるは、いとめづらかになむ。まづ、手にとり侍るだに、そぞろ寒きまでおぼえ侍り、わらはどもは、めでくつがへり侍りて、ひたひにのせ胸にあてなどしつつ、もて興じ侍るもをかしうなむ。されど、こは、おほやけのものにも供へ侍ると聞くなるを、いぶせき伏屋の心やりぐさになし侍らむは、なかなかに畏きわざなりや。とまれかくまれ、御まのあたりにこそ、よろこびは聞えつべけれ。

手にとるも、あなめづらしな、あつ氷、

遠きつげ野の、むかしおぼえて。

（村田春海）

三、月の夜友のもとに

いざたまへ、もろともに。この月のさやけきを、所せきつぼのうちにのみやは見はて侍らむ。なにがしなりどころに

（歌詞）

まからむ。それも、まらうどなどきあひて、あるじまうけする程ならば、それがしのかくれがにまからむ。それもありきたがひて、あらぬほどならば、北山の、律師の室を驚し侍らむ。そ

つげ野  
關鶴野、攝津  
國東成郡にあり。  
仁德天皇の時、冰室を置かれたり。

れももし、里におりたらむほどならば、うしろの山にのぼりて、夜もすがらめであかさむをいざたまへ、もろともに。

なべて世の塵をよそなる、高山の、

松のこずゑの、つきをいざ見る。

そめいろの  
峯

蘇迷盧山、即  
ち須彌山のこ  
と。

#### 四、雪の朝友のもとに

今朝のけしき、めづらしく御覽ぜずや。冬になるより、いつしかとのみ、日毎に待ちわたり侍りしに、昨日のゆふべ、風、いたく吹きあれ、雲のたたずまひも、いみじくさえわたりて、飛ぶ鳥のけしきまで、必ず降りぬべき空とは見えしかど、いと、かくまで深くとは思ひ給へざりきかし。あけくれ、心へだて

よし蹤つく

とも

續千載集、藤  
原兼信「來ね  
人も今朝はう  
らみじわれだ  
にもあとつけ  
がたき庭の白  
雪」。

ぬ友どちは、からぬをりだに、何事につけても、まづ思ひ給へ出でらるるわざなるを、まして、かくめづらかなる朝ぼらけを、心なき身の、ひとりのみ見侍らむことの、いとあたらしく思ひ給ふれば、よし、蹤つくとも、人の訪ひ給はましかば、こよなく、をかしさもまさりぬべきものをと思ひ給ふるに、いかにとだに、音づれもし給はぬは、いと思はずに、うらめしくなむ。この景色、さりとも見過しがたくはおぼさるらむものをとは、思ひやり聞えさせれど、しろしめすやうに、いとうひうひしき口には、何事をもいはれ侍らず。筆のしりとる博士だに侍らで、とりつくるひ侍らむやうも侍らねば、思ひ給ふるほどの心も、ただ押しこめてなむ。そこには、いかに見どこ

鳥の迹  
事物原始に、  
「蒼頽觀ニ鳥  
迹、因遂滋、則  
謂ニ之字ニ。」

ろある、心ふかき言の葉、多くものし給ふらむ。一つ二つたま  
はせよかし。さてなむ、せばき庭の雪の光もくははりて、友な  
き今朝のさうざうしさをも慰め侍らむ。いでや、かく聞えさ  
するも、もとより、あやしき鳥の迹の、今朝は、いとど、筆のさき  
しみこほりてはべれば、御覽じわくかたも侍らずや。あなか  
しこ。(本居宣長)

### 一七 祭のことば

芳宜園大人  
橋千隆。

ここに、文化の五とせ、九月八日、平春海、謹みて、芳宜園大人  
のおくつきの御前に、菊の初花、一枝をたむけ、香の木一ひら  
を焚きて、うなねつきて申さく、あはれ悲しきかも。君は、われ

に、十といひて、一とせのこのかみにおはすなるが、今、そのか  
みを思ひ出づるに、君は、まさに、さかりの齡におはして、われ  
は、まだ、童にてぞ侍りける。常に、縣居の庭に、物まなびにゆき  
かひたる時、朝にまゐるときは、君の御はかしの後に従ひ、夕  
にまかるときは、君の御袖のもとにすがりて、あひうるはし  
みまつれるごと、親子、はらからにも、なにかことならむ。書讀  
むとては、君を、師ともたふとみ、歌作るときは、われを、おとと  
ひのつらにぞ教へ給ひける。中頃にして、君は、つかへの道に、  
暇なくおはし、われは、世のさがにかかづらひて、おのづから  
疎き方にも過ぎつるを、君つかへを退き給ひて後は、われも、  
同じ衢にうつり住めば、花をたづねとては、われ、道しるべを

なし、月を思ふとては、君が舟にあひ乗り、うきことも、ともにうれへ、うれしきふしも、ともに喜びて、世にありふるわざの、まめごとも、あだごとも、かたみに、へだてなく、心をかはせること、今にはたとせ、そのはじめを繰りかへし數ふれば、あひ

集風  
毛毛  
春海

友たること、既に五十とせにぞあまりける。さるを、今おくれ奉りて、いつの世にかあひ見む。いづれの時にかこととはむ。つねなきは人の身のならひぞと知れども、これをいかでか歎かざらむ。かかるを、誰かは、よく堪へむ。あはれ悲しきかも。

賀茂の翁  
韓非子に「宋人有耕者、田中有株、兔走觸之、折頸而死。因釋耕守株、覬復得免。爲宋國笑也。」

舟にきだつくる  
呂氏春秋に、「楚人、劍自舟中墜水、遽契其舟曰、是我劍所從墜也。舟已行、而劍不行、不三亦惑」

文の林、世世に衰へ、言の葉の道、日日に下り行けるを、賀茂の翁、世に出で、今を捨てて、古にかへり、青雲の高き心しらひを求め、しづ機のあやなるみやびごとを尊みいへれど、株を守り、舟にきだつくるともがら、かれになづみ、ここにひかれて、猶あやしみ咎むるたぐひはおほく、たまあひて、よくうけひく、人なむ稀なりしを、君ひとり、心をおこして、あまねくさとしひろく誘ひしより、近き人は、まのあたりあひうづなひ、とほき人は、はるかになびき来て、古ぶりの歌、世に、さかりになりにけるは、まことに、君の力によりてなり。その、みづから詠み出で給へる歌を見るに、ふるき調、新しき姿、とりどりに備らざるなし。その、古をうつせるは、藤原寧樂の御世におよび、

*Amateur = 46 頁番**Amateur club*

後の巧に習へるは、堀河、鳥羽の御時に下らず。心に思ふことは、口に盡さざることなく、目に觸るるものは、詞にのぼせざることなむあらざりける。これを見て、高きも、低きも、愛で尊ばざる人なし。また、事ごのみの人は、その名を、君に知られては、身のおもておこしと思ひて、世にも誇り、君の一歌を得ては、價なき寶にもかへじといひてぞ、深く喜びける。さるを、今、金の聲、忽ち止みて、玉の響、再びきこえずなりぬるは、わがどちのなげきのみかは、大方の世人の憂ともいひつべし。これを、いかでか惜まざらむ。かかるを、誰かはしたはざらむ。あれ悲しきかも。わが、かくことあげするを、泉の下にも、さやかにきこし召し、天がけりても、はるかにみそなはせとなむ申

す。(村田春海—琴後集)

讀文

### 一八 文學藝術の三作用 その一

およそ、人の、その趣味性に適合せる文學、もしくは、藝術に接するや、少くとも、その當座、暫くは、心陶然として醉へるが如きを覺ゆ。これを、刹那の忘我と名づく。名畫に見入り、巧なる音樂を聽き、又は、面白き演劇を觀、面白き小説を讀める瞬間の感じ、即ちこれなり。

或は、いまだ曾て、かくの如き經驗なしといふ者もあらん。そは、生來の趣味性の、極めて鈍きか、然らずば、その鑑賞上の修養の不足なるが爲なるべし。藝術品の、高尚に過ぎたるた

めに、趣味を感じしめざる場合、もしくは、見馴れ、聞き馴れざるが爲に、聯想起らず、隨つて、深き味を解せず、それがため、興を覺えざる例はあれども、如何なる藝術品に對しても、いまだ曾て、何等の面白味を感じずといふが如きは、人性の自然にあらず。又、畫にもせよ、音樂にもせよ、詩歌小説にもせよ、その他の藝術品にもせよ、いまだ曾て、如何なる種類の人間をも、恍惚たらしめしことなしといふが如きものあらば、そは、名のみの藝術品ならん。苟も、文學藝術と稱する限は、少くとも、忘我作用だけは具へざるべからず。知識の上流に位する者の賤み斥くる類と雖も、社會の或階級の嗜好よりすれば、忘我作用は勿論、それ以上の效力をも有する例多し。

忘我以上の作用を、予は、遊神と名づく。こは、當の藝術を鑑賞する、その刹那、その瞬間のみ、心恍惚たるに止らず、譬へば、かの碁、將棋を好める者の、輸贏に、我を忘るるが如く、その當座幾十分時、時としては、その後二三時間、長き時は、その夜一夜、甚しきは三四日、さながら夢みつつあるが如く、惘然たるをいふ。能の「後三日」とは、かくの如き經驗をいへるなり。「三月、肉の味を知らず」といへるは、たゞこの種の心境を指せるにはあらずや。蓋し、藝術の供する、感興の筏に乗りて、われ知らず、情の海に浮び出でて、心を、別天地に遊ばしむるをいふなり。屑屑營營たる現實界を離れて、一種理想的なる世界にさまよふをいふなり。かかる心境に遊ばしむるを、文學藝術の微

云  
三月肉の云

論語に、「子  
在齊聞韶、  
三月不知肉  
味」。

妙なる作用となす。忘我作用に止れるは、その、なほ、甚だ低級なるを證す。

しかしながら、藝術の眞作用は、同化に至りて極る。作用の遊神に止れる間は、譬へば、かの安住の地を悟得せざるものと一般、一たびは、現實を離れたりと雖も、いつ、再び、現實へ復歸し來らんも知るべからず。所謂遊神は、夢裏の心境なり。藝術の微妙なる力に魅せられたる間は、心暫く、自我を脱して、或は飄逸なる、或は高遠なる、或は美麗なる別乾坤に遊ぶ。然れども、そは、その夢の穩なる間のみ。一たび、穢き、騒しき現實界の聲に呼び起さるるや、美しき夢裏の幻影は、忽然として消え、なまなかに、その夢の美しかりしが爲に、更に、愈現實の醜惡なるを覺ゆることなきにあらず。

思ふに、世間、大概の人の經驗せる所ならんが、幼時にありては、如何に奇怪なる夢と雖も、少くとも、これを夢みつある間には、夢と心附くこと稀なるを例とす。然るに、漸く成長し、自意識の發達するや、日夜に、心を勞すること多きがため、夢も、亦圓なる能はず。隨つて、その、夢見つつある最中にだに、こは夢なりと心附くこと、次第に多し。これ、その夢の破れやすき所以なり。それと同理によりて、人人の自意識の、著く鋭敏になり來れる今日においては、彼の忘我、遊神を、最上の作用となし、一種の美しき夢に遊ばしむることを以て、能事了れりとなすが如き文學藝術は、最早、人心を魅するに足らず。

隨つて、假令、刹那の忘我には用立つとも、長き遊神には用立たざるものゝ如し。現代の人は、藝術上の幻影か、現の人生か、殆ど辨別する能はざるまでに心醉し、且、同化せんことを欲す。かの偏に、技巧に依り、空想に頼る文學、藝術の、今は、昔時の如く歓迎せられざるは、主として、この理に本づくなり。

### 一九 文學藝術の三作用 その二

文學藝術の功用の、なほ單に、遊神に止れる間は、その、果して、男子畢生の事業と爲すに足るべしや否や、頗る、疑なき能はず。「人生は短し、藝術は壽し」と、古人はいひたり。然れども、これは、果して、古今東西、幾何の文學藝術にか適用せらるべき。英

人生は短し  
云々  
英國の諺。

槿花一朝の榮  
白樂天の詩  
に、「松樹千年  
終是朽、槿  
花一日自爲榮」。

空しく山丘  
云々  
李白の江上吟  
に、「屈平詞  
賦懸日月、  
楚王臺榭空山  
丘」。

雄豪傑の偉業は、槿花、一朝の榮にして、多くの星霜を経たる後には、空しく、山丘と化し、了れども、ひとり、文學者、藝術家の大作品は、長に、日月を懸くといふ。そは、果して事實なるべきか。古今東西の名篇傑作にして、今なほ、眞に、人心を鼓吹し得る程のもの、果して、多く、世に存せりや否や。げにや、長く、世に玩賞せられて、一時の忘我用、遊神用に供せらるる程度のものは、東西共に、決して少からざらんも、單に、さばかりの功用にては、果して、六尺の男子が、心血を濺ぎ、六十年、五十年の壽命を、四十年、三十年に縮めて、刻苦經營すべきものなるか否か、甚だ疑しといはざるべからず。宗教か、育英か、社會の改善か、政治か、實業かにたづさはりて、少くとも、一國、一代の爲に、

身を獻ぜん方、或は、一層立派なる事業にはあらざるか。予は、かくはいへど、文學藝術は、必しも、毎に、教化を目的とせざるべからずといふにはあらず。況や、その、實用的ならんことをや。畢竟、ここには、文學藝術の目的を論ぜんと欲するにあらず。唯、その、作用において、忘我、遊神以上に、幾段を進めて、他を同化せしむる力を具へざる間は、いまだ、眞の藝術的作用となすべからざるをいふのみ。

もし、それ、同化作用を有する藝術に接せんか、人は、その刹那において、自我を忘れ、その當時幾何時か、全く、現實を超脱して、さながら、別天地に遊行する感あるべし。しかのみならず、その感の、漸く薄らぎて、自我に復歸せる後と雖も、多少、わ

が好尚、もしくは性癖の一變したるが如き思あるを例とすべし。譬へば、催眠術によりて、精神療法を行はれたる不良少年などの場合に似たる心的現象を生ず。即ち、穢かりし心も、自然に美しく、荒荒しかりし心も、自然に優しく、めいりたりし心も引き立ち、快活になり、嚴肅になる。一言にて評すれば、當の藝術品の内容と、自家の心とが相融會して、一となるなり。狹隘なる現實界以外、もしくは以上に、いつしか、一の常住界、安住の別天地の成り立てるを意識して、何となく、心に、餘裕あるを覺ゆ。所謂心廣く、體胖なる状態これなり。これを藝術の同化作用となす。かくの如くにして、時を経る間に、自然の勢として、この状態を、自家以外に推し及さんと希ふ心を

心廣く云々  
大學に「富潤  
屋、德潤<sup>レ</sup>身、  
心廣體胖」。

生ず。ここに至りては、逆に、現實界を擧げて、藝術界にて、藝術家の經驗すると、全然同趣味のものとなさずんば止まざらんとす。ここに至りては、藝術家の態度は、頗る、宗教家の態度に似たるものとなり、強ひて、勸化門を開きてなりとも、世を擧げて、同一味に化せしめんと欲するに至る。

然れども、所謂同化作用は、或は高く、或は卑く、いづれの方に向にも向ふ。善化の用をもなせば、悪化の用をもなす。藝術の力は、よく、風を移し、俗を易ふ。かの、健全ならざる藝術の、風俗を壞ることある理も、これを推して考ふれば、自ら明白なり。古の賢君明主は、樂の正雅を貴び、淫哇を惡みき。音樂の、人心を動することは、最も廣く、かつ深ければならん。その理は、移し

て以て、あらゆる藝術の上に適用するを得べし。(坪内雄藏一作  
と評論)

## 二〇 鏡の影

### 一、時平の敕勸

延喜の帝、世間の作法したためさせ給ひしかど、過差を、えしづめさせ給はざりしに、本院の大臣、制を破りたる御さうぞくの、ことの外にめでたきをして、内にまゐり給ひて、殿上に侍ひ給ふを、帝、小蔀より御覽じて、御氣色、いとあしくならせ給ひて、職事をめして、世間の過差の制きびしき頃、左の大

本院の大臣  
藤原時平。一  
五三一年十一  
五六九年

きことなり。速にまかり出づべきよし仰せよ」と仰せられければ、職事うけ給りて、いかならむとおそれ覚えけれど、参りて、わななくわななく、しかじかのことと申しければ、いみじく驚きて、畏りうけたまはりて、御隨身のみさきまるも制し給ひて、急ぎまかり出で給ひ、一月程、門をささせて、簾の外にも出で給はず、人などのまゐるをも、勘當の重ければとて、あはせ給はざりけり。さてこそ、世の中の過差はやみたりしか。うちうちに承りしには、かくてばかりぞ靜らむとて、帝と、御心あはせさせ給へりけるとぞ。(天鏡による)

## 二、鶯宿梅

天暦の御時に、清涼殿の御前の梅の木の枯れたりしかば、

もとめさせ給ひしになにがしの主の、藏人にておはせし時、承りて、一京まかりありきしかども侍らざりしに、西の京の、そこそこなる家に、色濃く咲きたる木の、やうだい美しきが侍りしを掘りとりしかば、家あるじの、木に、これ結ひつけてもてまゐれ」といはせ給ひしかば、あるやうこそはとて、もてまゐりて候ひしを、何ぞとて御覽じければ、女の手にて書きて侍りける。

敕なれば、いともかしこし、鶯の、

宿はととはば、いかが答へむ。

とありけるに、あやしく思し召されて、なにもの家のぞとたづねさせ給ひければ、貫之ぬしの御娘の住むところなりけ

娘  
紀内侍とい  
ふ、古今六帖  
の著者とぞ。

り。遺恨のわざをもしたりけるかな」とて、悔いおはしましけり。(大鏡による)

### 三、けづり屑

花山院の御時に、五月下の闇に、五月雨も過ぎて、いとおどろおどろしくかきみだれ、雨の降る夜、帝、寂しくや思し召しけむ、殿上に出でさせおはしまして、遊びおはしましけるに、人人物語り申しなどし給ひて、背怖しかりし事なども申させ給へるに、今宵こそ、いとむくつけき夜なれ。かく、人勝なるにだに、怖しく覺ゆ。まして、物離れたるところなど、いかならむ。さらむ處に、ひとりいなむやと仰せられけるに、人人、「えまからじ」とのみ申し給ひけるを、入道殿は、「いづくなりとも

入道殿  
藤原道長。

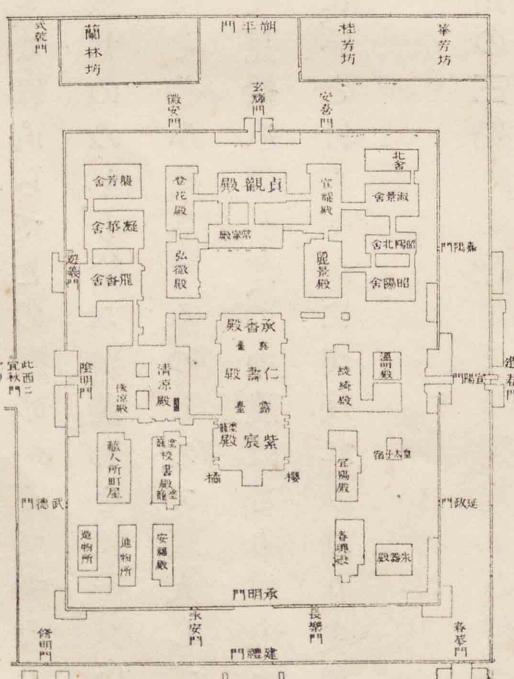
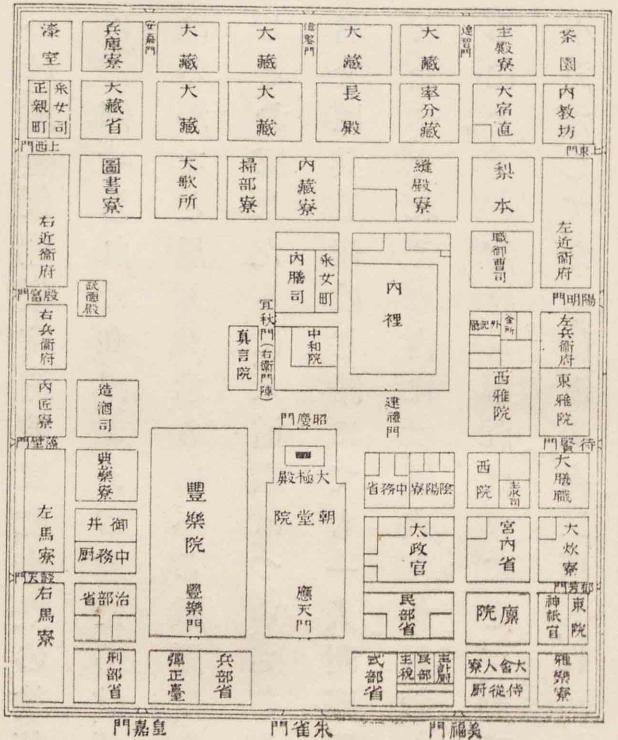
道隆  
中關白と稱す。(一六〇七年)  
道兼  
粟田關白と稱す。(一六二一年)  
道兼  
す。(一六二一年)

まかりなむ」と申し給ひければ、「いと興あることなり。さらばいけ。道隆は豊樂院、道兼は仁壽殿の塗籠、道長は大極殿へいけど仰せられければ、よその君たちは、便なき事をも奏してけるかなと思ふ。又、承り給へる殿原は、御氣色かはりて、益なしとおぼしたるに、入道殿は、つゆ、さる御氣色なくて、「私の從者をば具し候はじ。誰にても一人、昭慶門まで送れと仰せごとたべ。それより内には、獨入り侍らむ」と申し給へば、「證なき事にこそ」と仰せらるれば、げにて、御手箱におかせ給へる小刀として、たち給ひぬ。今二所も、にがむにがむ、各おはしましぬ。

かく仰せられ議する程に、丑にもなりにけむ。道隆は右衛

かたせ給へば、しかおはしましあへるに、中關白殿、陣まで、念門の陣より出でよ。道長は、承明門より出でよ」と、それさへわの砌のほどに、軒とひとしき人のあるやうに見えければ、物

じておはしたるに、ゆく手に、怪しき聲どもの聞ゆるに、術なくて、かへり給ふ。粟田殿は、露臺のあたりまで、わななくわななくおはしたるに、仁壽殿の東面



ふまじきによりて、高御座の南面の柱のもとを削りとりて候ふなり」と申し給ふに、いと、あさましう思し召さる。こと殿たちの御氣色は、今にも、なほ直らで、この殿のかくてまゐり給へるを、帝より始め、感じののしり給ふが、羨しきにや、又、いかなるにか、物もいはでぞ侍ひ給ひける。つとめて、藏人して、削屑を押しつけさせて見給ひければ、つゆ違はざりけりとぞ。そのけづり痕は、今に、いとけざやかにて残れりけり。(天鏡による)

#### 四、大堰川の三船

ひとつせ、入道殿の大堰に逍遙せさせ給ひしに、作文の船、管絃の船、和歌の船と分たせ給ひて、その道にたへなる人人

を乗せさせ給ひしに、公任の大納言殿のまゐり給へるを、入道殿「かの大納言、いづれの船にか乗らるべき」と宣はすれば、「和歌の船にのり侍らむ」と宣ひて、その船にのりてよみ給へるぞかし。

小倉山、あらしの風の、さむければ、

紅葉のにしき、きぬ人ぞなき。

申しうけ給へるかひありて、遊したりな。御自らも宣ふなるは、作文の船にぞ乗るべかりける。さて、かばかりの詩を作りたらましかば、名のあがらむこともまさりなまし。口惜しかりける業かな。さて、殿の『いづれにとか思ふ』と宣はせしなむ、われながら心おごりせられしと宣ふなる。一事のすぐる

小倉山  
山城國葛野郡  
嵯峨村。

公任  
藤原氏。四條  
大納言と稱す。(一六二六年一七〇一)

るだにあるにまして、かくいづれの道にもぬけ出で給ひけるは、古もあらぬことなり。(大鏡による)

## 一一 御民われ

詔に應じてよめる。

海犬養

岡麿

御民われ、生けるしるしあり、天地の、

榮ゆるときに、逢へらく思へば。

今奉部 與曾布

今日よりは、かへり見なくて、大君の、

しこの御楯と、出で立つわれは。

天平五年、遣唐使の船、難波をいづる時、母のよ

める。

たび人の、やどりせむ野に、霜ふらば、

わが子はぐくめ、あめの鶴むら。

丈部 稲麿

父母が、かしらかきなで、さくあれて、

いひし言葉ぞ、わすれかねつる。

棊檀越の、伊勢國に往きける時に。

檀 越 妻

神風の、伊勢のはまをぎ、をりふせて、

たびねやすらむ、あらき濱邊に。

病に沈める時に。

山上憶良

をのこやもむなしかるべき、萬代に、

語りつぐべき、名は立たずして。

詠者不詳

しきしまの、やまとの國は、言靈の、

たする國ぞ、眞幸くありこそ。

(萬葉集)

## 二〇 孟子と教育

教育の本位は、ただ一つしかない、それは、即ち人間である。人間が、萬物の靈長であると認められるのは、教育があるからである。この事に就いて、孟子は、夙に述べて居る。

孟子曰、人之所以異於禽獸者、幾希。庶民去之、君子存之。舜明

於庶物、察於人倫、由仁義行、非行仁義也。

「人間は動物と、大した違がないけれども、ただ一つ、違がある。それは何であるかといへば、即ち人倫である、仁である。しかし、それも、仁義に由つて行ふのはよいが、徒に、仁義を行ふのはいけぬ」といふので、人皆、人間である點は、この仁義に存するのである。苟も、仁義のないものは、禽獸と擇ぶところはない。人に、この仁義のあるは、即ち、教育の力である。

孟子曰、三代之得天下也、以仁。其失天下也、以不仁。國之所以廢興存亡者、亦然。

これは、やがて、教育が、國家の盛衰に關することを證據だててゐるのではあるまいか。

さて、われわれは教育はすべて自家發展でなければならぬと主張する。そして、この事は又孟子によく書いてある。

孟子曰、有<sup>ハ</sup>天爵者、有<sup>ハ</sup>人爵者。仁義忠信、樂善不倦、此天爵也。公卿大夫、此人爵也。古之人、修其天爵而人爵從之。今之人、修其天爵、以要人爵。既得人爵、而棄其天爵、則惑之甚者也。終亦必亡而已矣。  
ナニヤシ

「世の中には、本當に、その人の眞價と關聯した天爵と、人の作った爵位との二つがある。仁義忠信であつて、善を樂んで倦まないやうなのは天爵である。それから、大臣、公卿、大夫といふやうなのは人爵である。昔の人は、天爵を修めて、徳を積み、そして、自然と、立派な役人にもなつたが、今の人には、高等の教

育を受けるけれども、その教育は、むしろ、商賣の資本を投する位に思つて居る。従つて、一旦、立派に、役人となり、位を得ると、天爵を棄ててしまふ。さやうな人は、必ず亡びてしまふにきまつてゐる」といふのである。自家發展とは、天爵を修めることがある。それなら、如何にして、天爵を修めるかといふ問が出よう、それは、一言にして答へることが出来る。即ち、人間の眞價を發揮すればよいのである。

孟子曰、欲貴者、人之同心也。人人有<sup>ハ</sup>貴於己者、弗<sup>レ</sup>思耳。人之所貴者、非良貴也。趙孟之所貴、趙孟能賤之。詩云、旣醉以<sup>レ</sup>酒、旣飽以<sup>レ</sup>德。言飽乎仁義也。所以不願人之膏粱之味也。令聞廣譽施於身、所以不願人之文繡也。  
ナニヤシ

孟子がいふには、「誰でも、立派な人になりたい。これは、人人、皆同心で、一様に願ふところである。貴い者になりたいのは尤であるが、人間には、皆、自分自分の身體の中に、貴いものがある。人からつけてくれた、立派な位や、勳章は、眞に貴いものではない。位勳が貴くあつても、位記返上、勳記褫奪となれば、それきりであるが、己の眞價は、決して、没することは出來ぬ。」といふので、そこで、誰人も、まづ、己の眞價を發揮することが、自家發展の必要なところである。

既に、教育が必要であれば、また、教育學といふものもいる。教育學は、心理學に本づくもので、心理學は、人の心の自然の法則を示すものである。それで、自家發展的教育は、自然の法

則に従はなければならぬと思ふ。孟子は、また、この事を、二千年の昔において、はや唱へて居る。

孟子曰、拱把之桐梓、人苟欲生之、皆知所以養之者。至於身、而不知所以養之者。豈愛身、不若桐梓哉、弗思甚也。

「大きな桐や、梓でも、これを仕立てようと思へば、その仕立方は、誰にでもわかる。その方の學問が、林學である。しかるに、自分の身のことは、如何なる工合に教養するかといふ所以を、少しも知らない。林學も必要ならば、教育學も、更に、必要である。林學のみの大切なことを知つて、己の身を教養することを知らないのは、無考の甚しいものである」といふのである。果してさうであるならば、所謂法則とは、どんなものか、それ

は、又、左の一節を見るとわかる。

孟子曰、羿之教人射，必志於彀。學者亦必志於彀。大匠誨人，必以規矩。學者亦志以規矩。

さて、物事は、すべて規則がある。何でも、規則を踐んで行かなければ、名人上手にはなれぬ。そして、その規則は、卑近なところにある」といつて居る。即ち、

孟子曰、道在邇而求諸遠。事在易而求諸難。人人親其親，長其長，而天下平。

「人間は、親や兄弟に親んで、一家を治めれば、自然に、天下が平ぐので、何も、高遠のことをのみ詮索するには及ばない。日常のことを行つて居れば、それでよい」といふのである。なほ又、

孟子曰、梓匠輪輿能與人規矩，不能使人巧。

とかういつて居る。大工や、車を拵へる師匠などは、その弟子に、規だの矩だのといふ、コンパスや、尺度のやうな物の使用法を教へ、物の釣合など、一一ひ聽かすことは出来る。しかし、それから上は、教へることは出来ぬ。弟子達は、各自に工夫して、深く會得せねばならぬ。即ち、方法を第一とし、しかも、自家の會得を肝要とするといふことである。

さて、又、近頃は、教育學において、教育の要素といふことを、喧しくいふやうになつて來た。孟子は、教育の要素を、一は體得、二は尙志、三は敢爲、四は寡欲と分けてゐる。これを、本文に照して見ると、

孟子曰、堯舜性之也、湯武身之也、五霸假之也。久假而不歸、惡知其非有也。

「堯や舜は、天性のままであり、湯武は、又、これを體得して、いづれも、眞底から實行する。然るに、五霸といつて、齊の桓公とか、晉の文公とかの爲すことは、體得でなくて、附焼刃に外ならない。誰も、附焼刃と、氣は付くまいが、眞に體得したものでないから、役に立たぬ」といふのである。

王子塾問曰、士何事。孟子曰、尙志。曰、何謂尙志。曰、仁義而已矣。居仁由義、大人之事備矣。

これは、齊の國の王子塾といふ人が問うたことで、「われわれ紳士たるものは、何を事としたらよからう」。孟子いはく、「尙志

である」。「尙志とは何か」。いはく、「仁義を行ふことである。仁義を行つてさへ居れば、大人の事は備つて居る」といふ。畢竟、理想を高尚にすることである。

曹交問曰、人皆可<sub>シトチ</sub>以爲堯舜。有諸。孟子曰、然。交聞、文王十尺、湯九尺、今交九尺四寸以長。食粟而已、如何則可。曰、奚有於是亦爲之而已矣。有人於此、力不能勝一匹雞、則爲無力人矣。今曰、舉百鈞、則爲有力人矣。然則、舉鳥獲之任、是亦爲鳥獲而已矣。夫人、豈以不勝爲患哉、弗爲耳。徐行後長者、謂之弟、疾行先長者、謂之不弟。夫徐行者、豈人所不能哉。所不爲也。堯舜之道、孝弟而已矣。子服堯之服、誦堯之言、行堯之行、是堯而已矣。子桀桀之服、誦桀之言、行桀之行、是桀而已矣。曰、交得見於鄒君、可

以假館願留而受業於門。曰、夫道若大路然豈難知哉、人病不求耳。子歸而求之有餘師。

これは、努力の必要を極言したのである。曹交が問ふには『人は誰でも、堯舜のやうになれるといふが、さうでせうか』孟子がいふには『さうです』しかし、交の聞き及んだところでは、文王は身長十尺、湯は九尺といふが、私は九尺四寸もあるが、ただ、徒に穀潰しで居ます。どうしたらばよからう』それはお易い事です。折角一奮發して、やりさへすればよろしい。例へば、ここに、一人があつて『僅に一疋の家鴨の雛を持ち上げる事が出来ない』といったなら、それは、力無しとせられませう。しかし、もし又『百斤の重さをさし上げることが出来る』とい

つたら、大力の人であると驚きませう。さらば、晉の烏獲が持ち擧げただけの、重い鼎をさし上げたなら、鳥獲同様の大力といふべきでせう。畢竟、誰でも勉めてすれば、屹度出来ます。くよくよとすることは、年長者の後から、徐行して先んじないのは、弟たる道である。偶、この弟道を守らぬ人の多いのは、徐行することが出来ぬといふのではない。爲ないまでである。堯舜の道といふも、別にもづかしいことはない。孝弟の外はない。堯の衣服を著て、堯のいふことを言ひ、堯の行ふことを行ひさへすれば、それで堯である。桀の服、桀の言、桀の行をすれば、即ち桀である。いづれでも、爲すところのままである。ただ、努力如何にある』といったところが、交は、なほ、感奮

の色なく、斷乎たる決心が見えない。そして、これから、鄒の君にお目にかかるて、お宿を拜借することが出来た上で、ゆるゆる、先生のお許で、一番修業をして見たい」といった。すると、孟子は刎ね付けて、「修業などは御無用です。人道は、大路のやうなもので、別に、面倒はない。探し、へすればよい。お國に歸つて、自ら工夫さへすれば、充分出来ます。畢竟、自修自得の心掛が肝要である」と答へた。

孟子曰、養心莫善於寡欲。其爲人也寡欲、雖有不存焉者多矣。其爲人也多欲、雖有存焉者寡矣。

修養の極意は寡欲であるといふ。これは、西洋でも、昔は、隨分いつた人もあり、また、中世では、頻に、禁欲をいつたが、今はあ

まりいはぬ。むしろ、東洋流の消極論と見られ、又徒に、理性を尊んで、情意を輕蔑する議論とも見られる。しかし、實際、欲といふものは悪い。欲と理性とは別物である。これらは、低度の欲を指したと見れば、差支はなからう。

要するに、體得は自動で、摸倣であり、尙志は興味で、理想であり、敢爲は努力であると見られる。さて、この三者の外に、今一つ、寡欲を附け加へることも、亦、修養上、頗る肝要のことであらう。(谷本富一孟子と新教育による)

## 二三 小原御幸 その一

法皇は、文治二年の春の頃、建禮門院の小原の御住ひ、御覽

法皇  
後白河法皇。

小原  
山城國愛宕郡  
大原村。

清原深養父  
歌人。醍醐帝  
の朝に仕ふ。  
補陀落寺  
山城國愛宕郡  
靜原の山麓に  
ありき。

せまほしく思し召されけれども、二月、三月の程は、嵐烈しく、  
餘寒も、いまだ盡きず、峯の白雪絶えやらで、谷のつららも打  
ち解けず。かくて、春過ぎ、夏立ちて、北祭も過ぎしかば、法皇夜  
をこめて、小原の奥へ御幸なる。忍の御幸なりけれども、供奉  
の人には、公卿六人、殿上人八人、北面少少候ひけり。鞍馬通  
の御幸なりければ、かの清原の深養父が補陀落寺、小野の皇  
太皇后の舊迹、叢覽ありて、それより、御輿にぞ召されける。遠  
山にかかる白雲は、散りにし花のかたみなり。青葉に見ゆ  
る梢には、春の名残ぞ惜まる。卯月二十日餘のことなれば、  
夏草の茂みが末をわけ入らせ給ふ。

西の山の麓に、一字の御堂あり、即ち寂光院これなり。舊う



寂光院  
大原村大字草  
生にあり。天  
台宗。延暦寺  
別院なり。

ぞ遊ばされける。

池水に、みぎはの櫻、散りしきて、

波の花こそ、さかりなりけれ。

瓢箪屢空し  
云々  
橋直幹が申文  
中の語。  
原憲  
字は子思、孔  
子の門人。  
澤の中隠  
る。(四五一)

ふりにける岩の絶間より落ちくる水の音さへ、ゆゑよしある處なり。綠蘿の垣、翠黛の山、繪に書くとも、筆も及び難し。さて、女院の御庵室を覗覽あるに、軒には、薦朝顔はひかかり、しのぶまじりの忘草、瓢箪屢空し、草、顏淵が巷に滋く、藜藿、深く鎖せり、雨、原憲が樞を濕すともいひつべし。板の葺目もまばらにて、時雨も、霜も、おく露も、洩る月影に争ひて、たまるべしとも見えざりけり。後は山前は野べ、いささ小筈に、風さわぎ、世に立たぬ身の習とて、憂き節しげき竹柱、都の方の言

傳は、間遠に結へるませ垣や、わづかに言とふものとては、峯に木傳ふ猿の聲、賤が爪木の斧の音、これらが音づれならでは、正木のかづら、青つづら、くる人稀なる處なり。

法皇、「人やある、人やある」と召されけれども、御いらへ申すものもなし。ややあつて、古い衰へたる尼一人參つたり。女院は、いづくへ御幸なりぬるぞと仰せければ、「この上の山へ、花摘に入らせ給ひて候ふ」と申す。さこそ、世を厭ふ御習といひながら、さやうの事に仕へ奉るべき人もなきにや。御痛はしうこそと仰せければ、この尼申しけるは、「五戒十善の御果報盡きさせ給ふによつて、今かかる御目を御覽せられ候ふにこそ。捨身の行になじかは、御身を惜ませ給ひ候ふべき。因果

因果經  
四卷。宋の求  
那跋陀羅の  
譯。因果應報  
の例を擧げて  
教訓したるも

經には『欲<sup>セバ</sup>知<sup>ラント</sup>過去因<sup>ヲ</sup>見<sup>ヨ</sup>其現在果<sup>ヲ</sup>欲<sup>セバ</sup>知<sup>ラント</sup>未來果<sup>ヲ</sup>見<sup>ヨ</sup>其現在因<sup>ヲ</sup>』と説  
かれたり。過去未來の因果を、かねて悟らせ給ひなば、つやつ  
や、御歎あるべからずとぞ申しける。この尼の有様を御覽す  
れば、身には、絹布のわきも見えぬものを結び集めてぞ著た  
りける。あの有様にても、かやうの事申す不思議さよと思し  
召して、抑、汝は如何なるものぞと仰せければ、この尼、さめざ  
めと泣いて、しばしば、御返事にも及ばず。ややありて、涙を抑  
へて、申すにつけて、憚り覚え候へども、故少納言入道信西が  
女阿波内侍と申すものにて候ふなり。母は紀伊二位。さしも、  
御いとほしみ深うこそ候ひしに、御覽じ忘れさせ給ふにつ  
けても、身の衰へぬるほど思ひ知られて、今更、せむ方なうこ

紀伊二位  
名は朝子。

そ候へとて、袖を、顔に押しあてて、忍びあへぬ様、目も當てら  
れず。法皇、げにも、汝は、阿波内侍にてあるよとて、御覽じ忘れ  
させ給ふにつけても、ただ、夢とのみ思し召して、御涙せきあ  
へさせ給はねば、供奉の公卿殿上人も、不思議のこと申す尼  
かなと思ひたれば、理にて申しけりとぞ、各感じあはれける。

## 二四 小原御幸 その二

さて、かなた、こなたを覗覽あるに、庭の千草、露おもく、籬に  
倒れかかりつつ、外面の小田の水越えて、鶴たつ隙も見えわ  
かず。女院の御庵室へ入らせおはしまし、障子を引きあけて、  
覗覽あるに、一間には、來迎の三尊おはします。中尊の御手に

善導和尚  
隋の名僧。淨土の教義を鼓吹せし人。(一  
二七三年十一三四一年)

先帝  
安徳天皇。  
八軸の妙文  
法華經なり。  
八卷ある故に  
いふ。

九帖の御書  
善導の觀無量壽經の疏なり。  
九卷ある故に  
いふ。

大江定基法師  
法名寂昭。(一  
一六八八年)

清涼山  
五臺山ともいふ。清國山西省にあり。

は、五色の絲をかけられたり。左に普賢の畫像、右に善導和尚、竝に先帝の御影をかけ、八軸の妙文、九帖の御書も置かれたり。蘭麝の匂にひきかへて、香の煙ぞ立ちのぼる。障子には、諸經の要文ども、色紙に書いて、所々におされたり。その中に、大江の定基法師が、清涼山にて詠じたりけむ、「笙歌遙聞孤雲上、聖衆來迎落日前」とも書かれたり。少しひきのけて、女院の御歌とおぼしくて、

思ひきや、み山の奥に、すまひして、  
雲井の月を、よそに見むとは。

さて、傍を観覽あるに、御寢所とおぼしくて、竹の御竿に、麻の御衣、紙の衾などかけられたり。さしも、本朝漢土の、たへな

る類數を盡しし綾羅錦繡の粧、さながら夢にぞなりにける。法皇、御涙を流させ給へば、供奉の公卿殿上人も、まのあたり見奉りしこども、今のやうに覚えて、皆、袖をぞしほられける。

ややあつて、山の上より、濃き墨染の衣著たりける尼二人、岩のかけぢを傳ひつつ、おり煩ひたるさまなりけり。法皇、あれは如何なるものぞ」と仰せければ、老尼、涙を抑へて、花筐、臂にかけ、岩躊躇取り具して持たせ給ひて候ふは、女院にて渡らせ給ひ候ふ。爪木に、蕨折り添へて持ちたるは、鳥飼中納言行綱の養子、先帝の御乳母大納言典侍局と申しもあへず泣きにけり。法皇、御涙を流させ給へば、供奉の公卿殿上人も、皆、

袖をぞ濡されける。女院は、世を厭ふ御習といひながら、今かかる有様を見えまゐらせむずらむ恥しさよ、消えも失せばやと思し召せども、かひぞなき。宵宵毎の閑伽の水、むすぶ袂もしをるるに、曉起の袖の上、山路の露もしげくして、絞りやかねさせ給ひけむ。山へも返らせ給はず、又、御庵室へも入らせおはしまさず、呆れて立たせましたる處に、内侍の尼参りつつ、花筐をば賜りけり。

「世を厭ふ御習、何か苦しう候ふべき。早早、御見參ありて、還御なし参らせ候へ」と申されければ、女院、御涙を抑へて、御庵室に入らせおはしまし、「一念の窓の前には、攝取の光明を期し、十念の柴の樞には、聖衆の來迎をこそ待ちつるに、思の外

の御幸かな」とて、御見參ありけり。平家物語

## 二五 神道

皇大御國は、掛けまくもかしこき神御祖天照大御神の御生れませる大御國なり。大御神の大御手に、天つ璽レウを捧げ持ち給ひて、「萬千秋の長秋に、吾が御子のしろしめさん國なり」と宣ひしより、天雲のむかふすかぎり、谷蟆ハタガのさわたるきはみ、皇御孫尊ミコトのしろしめす國と定りて、天が下には、荒ぶる御神もなく、まつるはぬ人もなくなりぬ。それより、いく萬代の末まで、代代の天皇は、大御神の御子とましまして、天つ神の御心を大御心として、神代も、今もへだてなく、神の道に隨ひ

給ひて、安らげく、平けくしろしめしける大御國なりければ、古の大御世には、道といふ言舉も、更になかりき。もとより、ただ物にゆく道をこそ、道とはいひけれ。物のことわりあるべきすべ、萬の教事をしも、何の道、くれの道といふことは、外國のさだめなり。

然るを、やや降りて、書籍といふもの渡り來り、そを學び讀むこと始りてより後、その國の手ぶりをならひて、やや、萬の事のうへに交へ用ゐらるる御代になりてぞ、大御國の古の大御手ぶりを、取り別けて、神の道とは名づけられたりける。そは、かの外國の道道にまがふがゆゑに、神といひ、又、かの名を借りて、ここにも、道とはいふなり。その後、御代を經るまま

## 義長

シズカラビ

ヒトミ

タリフ・ホフ

ヤマヨウ花

後には混りにけれ。

そもそも、この天地の間にありとあることは、悉く、神の御心にて、天照大御神、高天原にましまして、大御光は、いささかも曇りまさず、この世を照し給ひ、又、天つ靈も亡びうせず傳りまして、宣ひしまにまに、皇御孫尊は、天の下をしろしめして、天津日嗣の高御座は、天地と共に、ときはにかきはに動くことなし。これ、この道の外國の萬の道にすぐれて、あや靈しく奇しく、正しき、高き、貴き徴なり。

そも、この道はいかなる道ぞと尋ねるに、天地のおのづからなる道にもあらず、人の作れる道にもあらず、この道こそは、かしこき高御產巢日神の御靈によりて、神祖伊邪那岐大神、伊邪那美大神の始め給ひて、天照大御神の受け給ひたも

ち給ひ、傳へ給へる道なり。故に、これを、神の道とは申すぞかし。(本居宣長—直毘靈による)

修訂中等國語讀本卷十 終

明治四十五年八月十五日

文部省検定 濟中國語學科用校

發行所

〔東京市神田區錦町一丁目長電話本局一四三八番〕

明

（振替貯金口座四九九一番）治書院

印發刷行者兼

〔東京市神田區錦町一丁目十番地〕

平



著者 故落合直幸

相續者 落合直

補修者 文學博士萩野由之

補修者 文學博士森林太郎

（文學博士）森林太郎

明治四十四年十月十四日修訂印刷

明治四十五年一月五日修訂再版印刷

明治四十五年一月八日修訂再版發行

修訂中等國語讀本（全十冊）  
價各卷金貳拾五錢

五三  
森林太郎

